

熊本県文化財調査報告第 192 集

竹 迫 宇 土 遺 跡

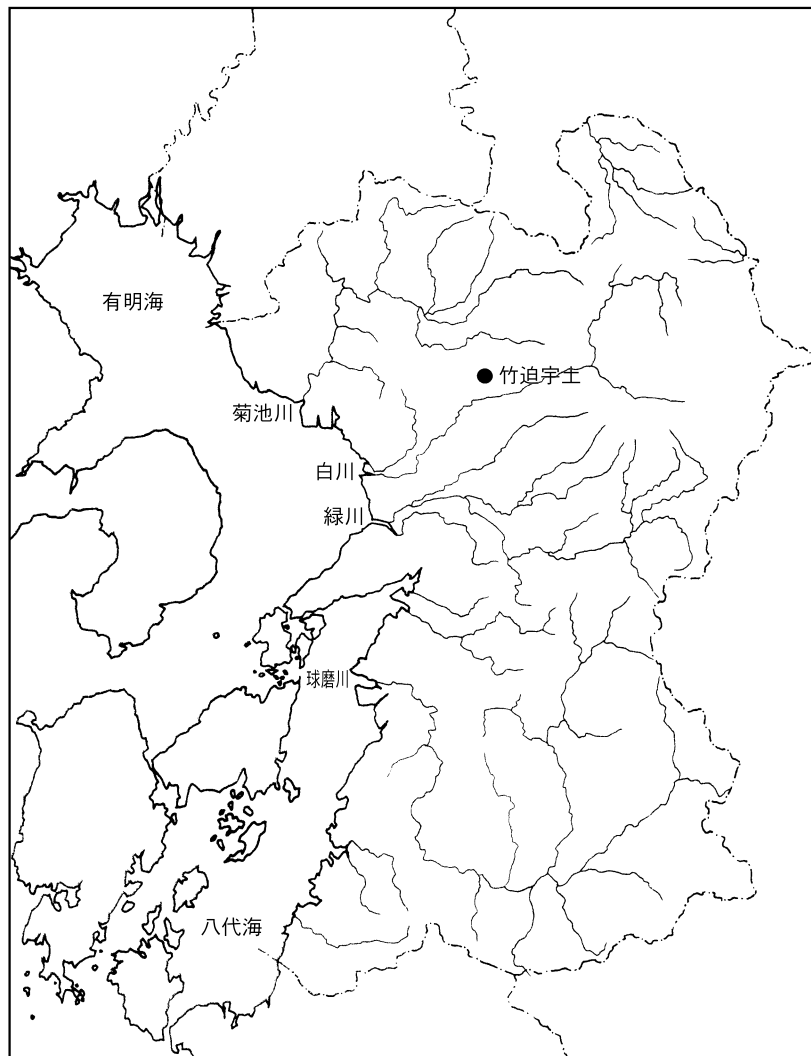
— 県道熊本大津線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告 —

2 0 0 0 . 1 2

熊 本 県 教 育 委 員 会

たか ば う と い せき
竹 迫 宇 土 遺 跡

- 熊本県菊池郡合志町に所在する埋蔵文化財調査報告 -



2000.12

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、県道熊本大津線単県道路改良事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

ここに報告する竹迫宇土遺跡は、熊本県菊池郡合志町竹迫宇土に所在する遺跡で、平成9年度に発掘調査を実施し、平成11・12年度に報告書作成を行ったものであります。

この発掘調査では、縄文時代後期の多くの資料を得ることができ、この地域の縄文文化を考えるうえでの貴重な資料となりました。

この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、専門調査員の先生方からは多大な御指導・御助言を賜わり、感謝いたしております。また、多方面にわたり御配慮いただいた熊本県土木部道路建設課、同菊池土木事務所、合志町教育委員会をはじめ、御協力いただいた関係各位に、心から厚くお礼を申し上げます。

平成12年12月28日

熊本県教育長 田 中 力 男

例 言

- 1．本書は、平成9年度に熊本県教育委員会が、県道熊本大津線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財「竹迫宇土遺跡」発掘調査の記録である。
- 2．本書に掲載した「竹迫宇土遺跡」は、熊本県菊池郡合志町竹迫宇土に所在する。
- 3．現地調査は平成9年3月より実施し、村崎孝宏・長谷部善一・北原美和子・阿南亨・河津摂が担当した。
- 4．本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000・1：50,000）をもとに作成した。
- 5．国土座標軸による測量基準杭の設定は、(有)埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 6．発掘調査での遺物取り上げ作業は、(有)埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 7．遺物の整理作業は、平成11年度に熊本県文化財収蔵庫で行った。
- 8．遺物の実測は、土器を村田百合子が、また石器を村崎が行った。
- 9．遺構及び遺物実測図の製図は、村田が行った。
- 10．遺物分布図の作成は、村田が行った。
- 11．遺物の写真撮影は、杉井涼子・田上瑞恵・村田が行った。
- 12．本書の編集は、熊本県教育委員会が行い、村崎が担当した。
- 13．出土遺物及び調査に関する記録類は、一括して熊本県教育委員会が保管している。

凡 例

- 1．本書に使用した地形図の一部は、熊本県菊池土木事務所から提供を受けたものを基礎にしている。
- 2．遺構の深さは、断りがないものは検出面からの深さである。
- 3．現地での遺構実測は、1/10又は1/20の縮尺で行い、本書収録の際には、1/20、1/40、1/60の縮尺となっている。
- 4．遺物の実測は、1/1で行った。本書収録の際には、石器が2/3、3/4、土器が1/2の縮尺となっている。
- 5．遺構を個別に説明する際用いた「東西南北」については、各々の遺構での任意方向である。

本文目次

序文

例言

凡例

第 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯..... 1

第 2 節 調査の方法と経過..... 2

第 章 遺跡の立地と環境

第 1 節 地理的環境..... 4

第 2 節 歴史的環境..... 5

第 3 節 基本層位..... 8

第 章 調査の成果

第 1 節 縄文時代の遺物..... 9

1 遺構..... 9

2 土器..... 9

3 石器..... 18

第 2 節 その他の時代の遺構と遺物..... 23

第 章 総 括

図版

報告書抄録..... 39

挿 図 目 次

第 1 図	地形図.....	3
第 2 図	地形分類図.....	4
第 3 図	遺跡分布図.....	6
第 4 図	基本土層図.....	8
第 5 図	遺構配置図.....	10
第 6 図	遺構実測図.....	12
第 7 図	遺物分布図.....	12
第 8 図	遺物実測図.....	13
第 9 図	遺物実測図.....	14
第10図	遺物実測図.....	15
第11図	遺物実測図.....	16
第12図	遺物実測図.....	20
第13図	遺物実測図.....	21
第14図	遺構実測図.....	22
第15図	遺構実測図.....	23

表 目 次

第 1 表	竹迫宇土遺跡発掘調査の経過.....	2
第 2 表	遺跡地名表.....	7
第 3 表	土器観察表.....	17
第 4 表	石器組成表.....	18
第 5 表	石器計測表.....	19

図版目次

図版 1	A区完掘状況・B区完掘状況.....	27
図版 2	1号溝完掘状況・2号溝完掘状況・3号溝完掘状況.....	28
図版 3	4号溝完掘状況・5号土坑完掘状況・6号溝完掘状況.....	29
図版 4	7号溝完掘状況・8号溝完掘状況・9号土坑完掘状況.....	30
図版 5	10号溝完掘状況(北西より・南東より)・焼土集中1.....	31
図版 6	焼土集中2・焼土集中1完掘状況・焼土集中2完掘状況.....	32
図版 7	縄文土器.....	33
図版 8	縄文土器.....	34
図版 9	縄文土器.....	35
図版10	縄文土器.....	36
図版11	縄文土器・縄文石器.....	37
図版12	縄文石器.....	38

第 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯

熊本県教育庁文化課は、平成 6 年 12 月 13 日付け教文第 1184 号で熊本県菊池土木事務所あて「平成 7 年度以降予定の公共事業照会」を行い、平成 7 年 1 月 6 日付け菊土第 1371 号により回答された。

提出された内容について、遺跡台帳との照合及び現地踏査を実施し、その結果を菊池土木事務所長あて通知した（平成 7 年 8 月 21 日付け教文第 756 号）。当該事業予定地については、周知の埋蔵文化財包蔵地「竹迫宇土遺跡」に該当するため、文化財保護法第 57 条の 3 の規定による発掘通知の提出と事前の確認調査の実施が必要となる旨通知した。

このことを受け平成 7 年 11 月 22 日付け菊土第 1130 号で確認調査依頼（第 1 次）が提出され、熊本県教育庁文化課は平成 7 年 12 月 18 日～20 日に現地における確認調査（第 1 次）を実施し、「縄文時代の遺物包含層が検出され、本調査が必要である。なお、現道北側においても遺跡が存在する可能性があるため今後確認調査が必要である。」との報告を行った（平成 7 年 12 月 28 日付け教文第 1202 号）。

その後、平成 8 年 7 月 15 日付け菊土第 636 号で再度依頼が提出され、平成 8 年 9 月 4 日、10 日に確認調査を実施した。その結果遺構、遺物が検出され「第 1、2 次確認調査で埋蔵文化財が確認された約 1,600m² については、事前の発掘調査が必要である」旨通知した（平成 8 年 9 月 18 日教文第 847 号）。

この結果を受け協議を重ね、平成 9 年 3 月より「竹迫宇土遺跡」の発掘調査を開始し、同年 6 月終了した。遺物整理、報告書作成については、年度内に遺跡全体を取りまとめることはできないと判断し、平成 11 年度に遺物の整理を行い、報告書印刷は平成 12 年度に行うこととした。

調査の組織

平成 8 年度本調査

調査責任者 桑山 裕好（文化課長）
 調査総括 松本 健郎（主幹・文化財調査第 2 係長）
 調査担当 長谷部善一（学芸員）、北原美和子（囑託）、阿南 亨（囑託）

平成 9 年度本調査

調査責任者 豊田 貞二（文化課長）
 調査総括 島津 義昭（主幹・文化財調査第 2 係長）
 調査担当 村崎 孝宏（文化財保護主事）、北原美和子（囑託）、阿南 亨（囑託）、河津 撰（囑託）

平成 11 年度整理・報告書作成

調査責任者 豊田 貞二（首席教育審議員・文化課長）
 調査総括 島津 義昭（課長補佐）、江本 直（主幹・文化財調査第 2 係長）
 報告書作成 村崎 孝宏（文化財保護主事）、村田百合子（臨時）

調査指導及び協力者（順不同）

長谷部善一（熊本県立装飾古墳館主任学芸員）、熊本県土木部道路建設課、熊本県菊池土木事務所
 合志町教育委員会

第 2 節 調査の方法と経過

当該地点での熊本大津線道路改良工事は、竹迫宇土遺跡の包蔵地内をほぼ東西に横断し、現道を南北両側に拡幅する計画である。そのため調査区は、現道を挟み両側に設定されることとなり便宜的に北側を A 区、南側を B 区として調査を行った。調査面積は、A 区（約500m²）、B 区（約1,100m²）である。

調査区が現道を挟んで南北 2 ヶ所に分断されているため、(有)埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に業務委託し、国土座標軸を使用する区画設定を行った。当該調査範囲は、両調査区とも幅が狭く距離が長いので 5 m × 5 m の区画を設定し、北 南へ A ~ J、東 西へ 1 ~ 22 とした。このようにして設定した区画を基本として調査を実施した。なお、当該調査範囲には、先述したように現道により南北に区分される。そのため、調査の便宜上、北側を A 区、南側を B 区として区分した。

調査の手順と方法は、以下のとおりである。

調査区が A、B 区と 2 ヶ所に分散するため、表土除去作業後検出される遺構等の悪化を防ぐため、まず A 区について重機による表土除去を行い、その清掃の後 5 m × 5 m の区画を設定し、南北軸の両端に便宜的に杭を設定した。B 区については、A 区の調査が終了した段階で表土除去作業を実施し同様に区画を設定した。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。

遺構は、平面形の確認を行った後に、土層堆積の観察を行うための土手を残し掘り下げた。記録を行った。その記録の後、残りを掘り下げ完掘し、全体像を確認する。

この作業の途中で、検出された柱穴群から建物の復元が可能であるかの検討を行った。

これらの作業の際に作成される資料には、1/10、1/20 に縮尺して作る平面図、土層断面図、断面図などがある。

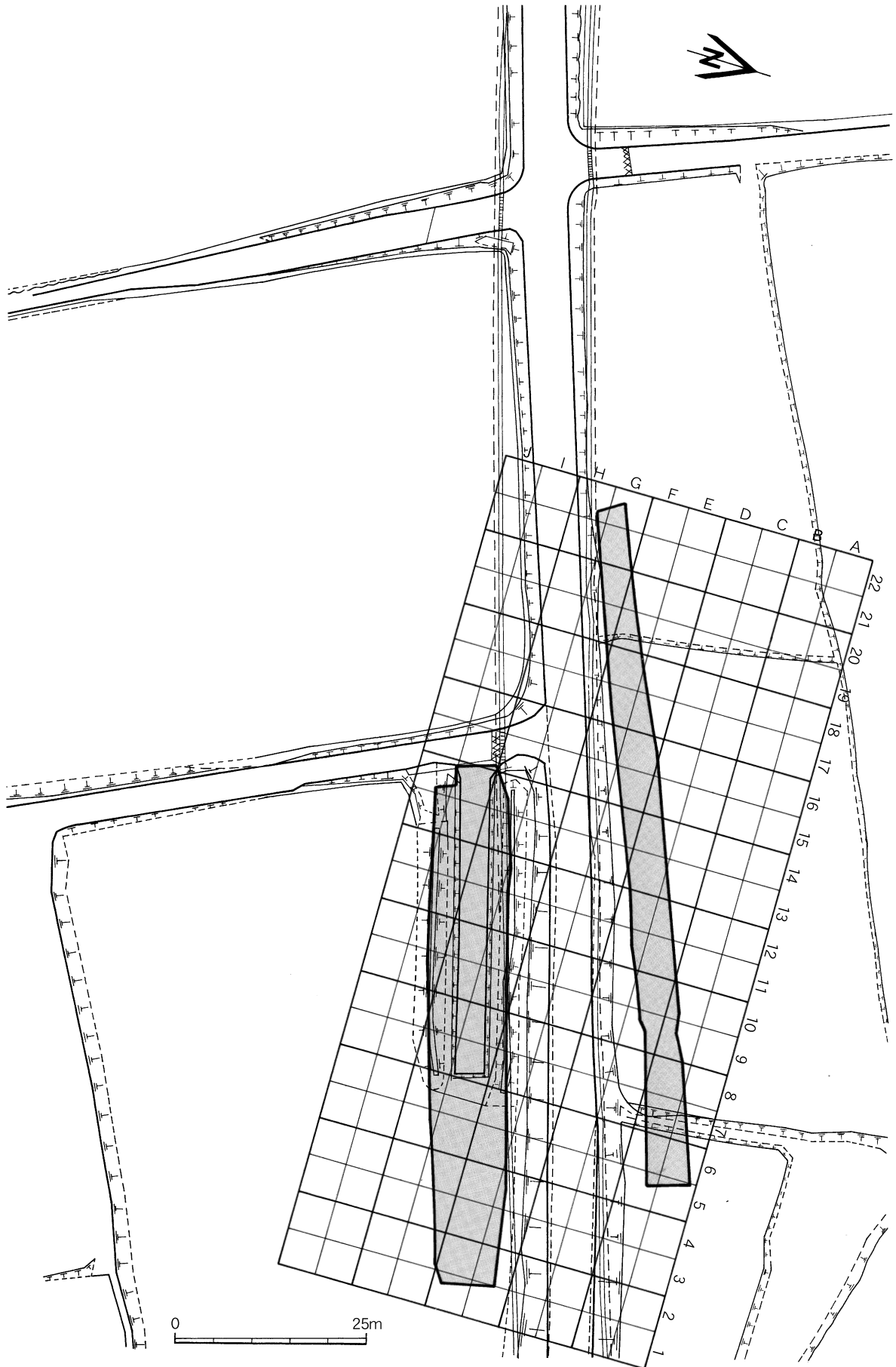
遺物の検出は、上記した遺構調査の完了後に実施した。検出遺物は、区画別、基本土層別、遺物の種類別に台帳を作成し遺物番号を付した。この台帳に記載する事項には、土器型式、文様、石器器種、石材などがある。

こうした発掘作業のほか、関連遺跡として周辺に分布する遺跡の所在確認調査を実施した。その成果は、第 2 章第 2 節の歴史的環境の項に示している。

調査の経過は、下表のとおりである。

第 1 表 竹迫宇土遺跡発掘調査の経過

月	内 容
2	<ul style="list-style-type: none"> ・現地において発掘調査範囲の確認と廃土仮置きのための場所の検討を行う。 ・調査事務所の建設及び表土除去作業の準備を行う。 ・合志町教育委員会の協力を得て、発掘調査作業員の募集を行う。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・A 区の表土除去作業を行い発掘調査を開始する。 ・調査区内を清掃し、遺構の検出作業を行う。調査区画の設定。 ・基本土層の確認。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・A 区の遺構検出と精査及び記録。 ・A 区の掘り下げ、遺物の検出、取り上げ。 ・遺構検出状況の写真撮影。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・B 区の表土除去作業の実施。調査区画の設定。 ・B 区の遺構検出と精査及び記録。 ・B 区の掘り下げ、遺物の検出、取り上げ。 ・遺構検出状況の写真撮影。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・B 区の掘り下げ、遺物の検出、取り上げ。 ・遺跡遠景写真撮影。 ・調査終了、器材搬出。



第1図 地形図

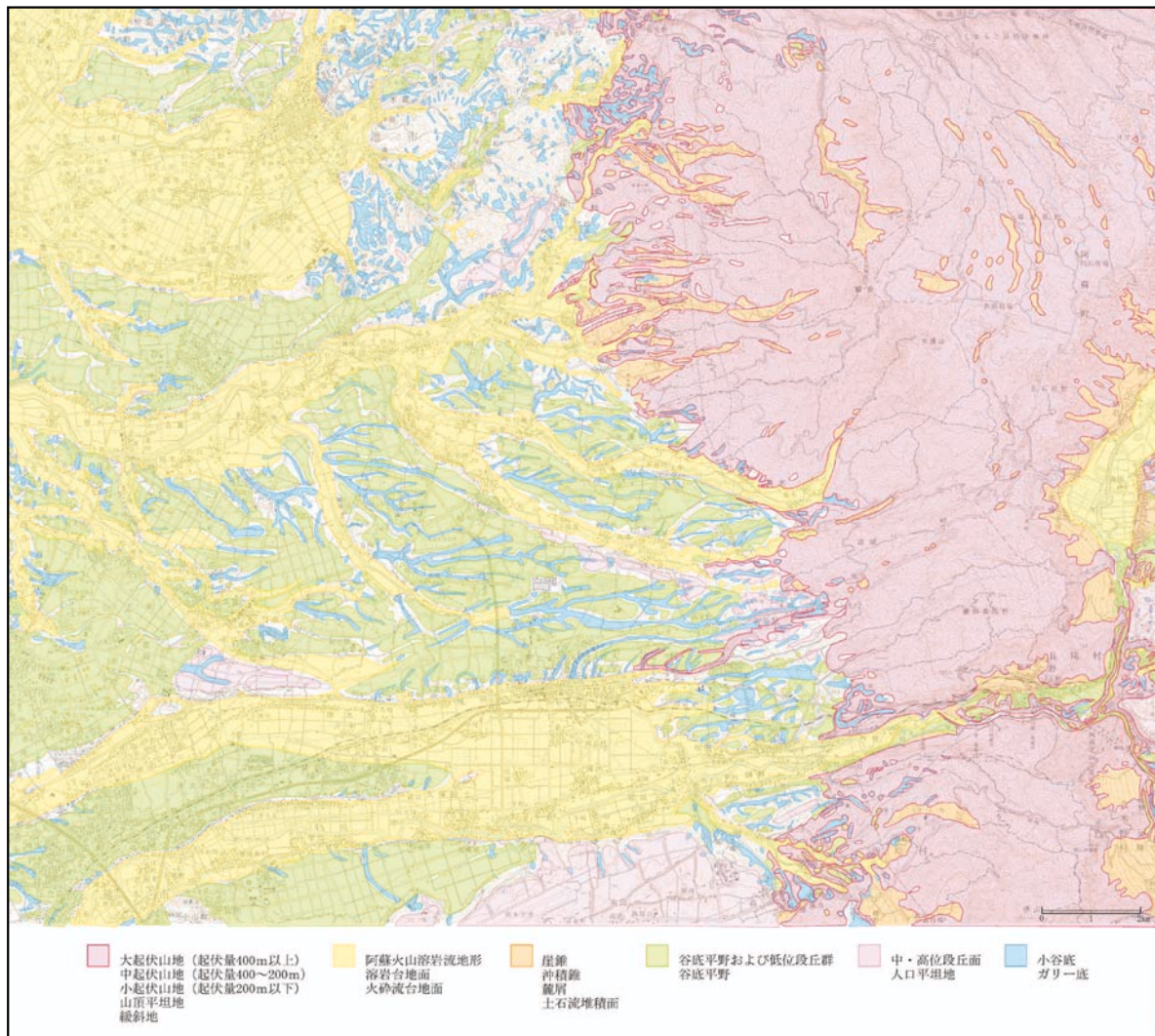
第 章 遺跡の立地と環境

第 1 節 地理的環境

竹迫宇土遺跡の所在する合志町は、熊本県の北部に位置し、南東は菊陽町、西は西合志町、北東は泗水町、大津町、南は熊本市と境を接する。東には阿蘇外輪山の一角をなすツームシ山（1,064m）、鞍岳（1,186m）、矢護山等が連なり、これらの山塊の西側には阿蘇の大規模な火山活動による多くの噴出物が広範囲に堆積し、合志台地を形成している。この合志台地は、火山灰土壌のため透水性が強く、雨水は地下に浸透し地表の流水がほとんどみられないため、起伏の少ない傾斜の緩やかな地形を形成している。このような地形にあって南西側には、褶曲運動による起伏で形成された群山（145m）、飯高山（125m）がみられる。

当該地域の多くが標高60～100mの合志台地で占められ、東部に源を発する塩浸川が北西へ流れ台地に浅く広い谷を刻んでいる。

地質は、前述したように阿蘇起源の火山噴出物が厚く堆積した火山灰土壌であり、基層には菊池・託麻砂礫層が存在する。



第 2 図 地形分類図

第 2 節 歴史的環境

1. 旧石器時代

現在まで合志町で確認されている遺跡は、24ヶ所である。これらのうち旧石器時代に属する遺跡は、発見されていない。周辺では、白川左岸の託麻台地に石の本遺跡群があり8区をはじめ20、22、54、55区等複数の時期に属する良好な資料が提出されている。しかし、当該地域が所在する同右岸においては、熊本市庵の前遺跡や谷口遺跡、竜田陣内遺跡等で断片的にその存在を知る資料が提出されているに止まる。

2. 縄文時代

当該地域において、現在まで確認されている縄文時代の遺跡は8ヶ所である。早期の押型文土器が出土した遺跡は、轟遺跡、野付遺跡等がある。このほかの遺跡からは、中期後半以降に属する遺物が出土している。

このように現在当該地域で確認されている縄文時代の遺跡は、時期的に偏りが認められ中期後半～後期に急激に増加する傾向が認められる。

特に、御手洗遺跡は後期の「御手洗式土器」の指標となる資料が提出されている。

また、これらの中で竹迫宇土遺跡は、以前から三万田式土器を出土する遺跡として周知されていた遺跡である。

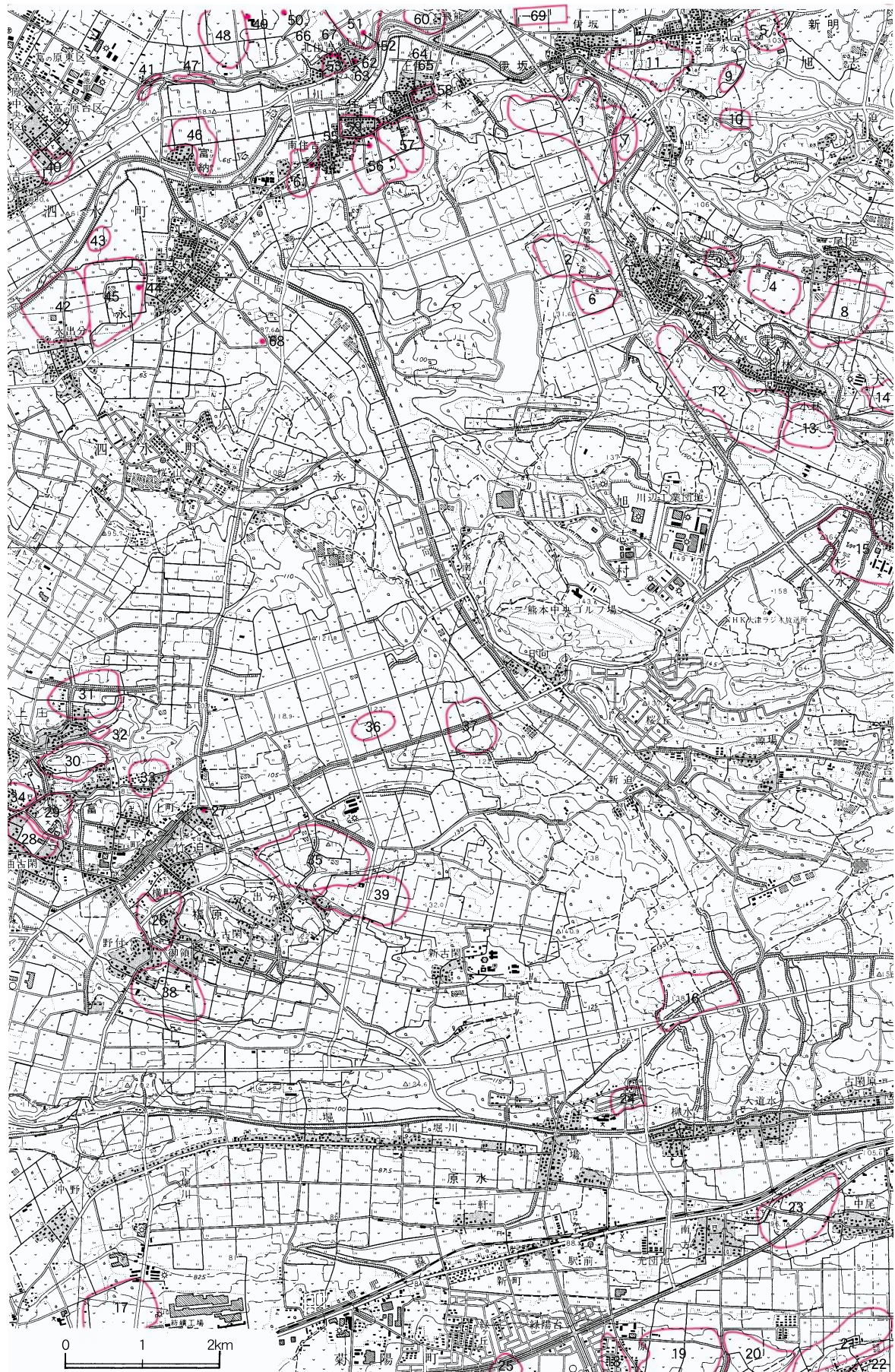
3. 弥生時代

弥生時代の遺跡は、9ヶ所である。その所属時期は、中期～後期である。それ以前の時期に属する遺跡は未発見である。これらの遺跡は合志台地の間にみられる、小河川の浸食作用により開析された浅い溺谷に沿って分布する。

このうち、木瀬遺跡、中林遺跡、野付遺跡、千経塚遺跡等では当該期の住居址等が検出されており、当地に集落が営まれていたことを知ることができる。しかし、調査事例は少なく、また調査が実施された千経塚遺跡にあっても未報告であるため詳細については不明である。

4. 古墳時代

古墳時代に属する遺跡は、4ヶ所である。中林古墳、ヤンボシ塚古墳、虚空蔵横穴等である。しかし、調査例が少なく、詳細については不明な点が多い。



第3図 遺跡分布図

第 2 表 遺跡地名表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	16	伊坂上の原	伊坂 上の原	縄文・弥生	包蔵地		御領式・野辺田式土器
2	17	ヒララ石	川辺 柏木	縄文・弥生	包蔵地		摺消、縄文支石墓、石斧
3	18	四郎丸	川辺 小が原など	縄文・弥生	包蔵地		御領式・野辺田式土器
4	19	西鶴	尾足 (通称西鶴)	縄文・弥生	包蔵地		
5	20	高永	新明 高永	縄文・古墳	包蔵地		御領式・須恵器
6	21	柏木	川辺 柏木	縄文・弥生	包蔵地		磨消縄文・御領式
7	22	西原	川辺 西原	縄文	包蔵地		曽畑式・阿高式土器・須恵器
8	28	尾足原	尾足 南原	縄文・弥生	包蔵地		御領式・野辺田式
9	36	前畑	新明 前畑	弥生・奈良	包蔵地		弥生、土師器、東路跡
10	37	栄ノ平	新明 栄ノ平	縄文～中世	包蔵地		
11	38	伊坂東原	伊坂東原	縄文～中世	包蔵地		
12	2	ワクド石	杉水 西の原、西ノ尾	縄文	包蔵地		初痕ある御領式土器
13	3	塔の本	杉水 塔の本	縄文	包蔵地		押型文
14	5	尾鶴	杉水 小迫・尾鶴	縄文	包蔵地		縄文晩期・土師器
15	16	杉水上ノ原矢鉾	杉水 上ノ原・矢鉾	縄文・弥生	埋葬		甕棺墓、支石墓、縄文、弥生土器・土師・須恵
16	1	原水大人足	原水 大人足	縄文～古代	包蔵地		
17	3	上沖野	原水 上沖野	縄文	包蔵地		
18	5	久保田下原	久保田 下原	弥生～平安	包蔵地		
19	6	久保田中原	久保田 中原	縄文・弥生	包蔵地		
20	7	久保田出分上原	久保田 上原	古墳	包蔵地		土師器
21	8	久保田中岡	久保田 中岡	弥生	包蔵地		
22	9	楠ノ木	久保田 楠ノ木	縄文・古代	集落		越 白磁
23	11	南方上	原水 南方下	縄文～中世	包蔵地		
24	12	柳水	原水 柳水	縄文～中世	包蔵地		
25	13	原水南上原	原水 上原	縄文～中世	包蔵地		
26	8	野付	福原 野付	縄文他	包蔵地		押型文、黒髪式甕棺
27	9	医者寺跡	竹迫 屋敷	中世	寺社	町	古塔、一字一石経塔
28	10	陣の内	幾久富 陣の内	弥生他	包蔵地		須玖式・野辺田式土器・石包丁
29	11	宮の前	上庄 宮前	弥生	包蔵地		弥生、須玖式・黒髪式・土師器
30	13	竹迫城跡	上庄 城山	中世	城	町	中世城
31	14	木瀬	上庄 (通称木瀬)	弥生	包蔵地	町	重孤文土器・石包丁
32	15	虚空蔵横穴	上庄	古墳	古墳		
33	16	御手洗	幾久富 御手洗	縄文他	包蔵地	町	縄文後期・土師器・御手洗式
34	17	原口城跡(新城跡)	富岡 宮の本	中世	城		
35	18	桑鶴	竹迫 福原	縄文・弥生	包蔵地	町	昭50年圃場整備
36	19	八久保	竹迫 (通称八久保)	縄文	包蔵地		阿高式・御領式
37	20	竹迫宇土	竹迫宇土	縄文	包蔵地		三万田式
38	23	御領	竹迫 福原	縄文他	包蔵地		土偶・御領式土器
39	24	轟	豊岡 福原	弥生	包蔵地		黒髪式
40	33	村吉	吉富 高畠	古代	包蔵地		蔵骨器・須恵器
41	34	今寺横穴群	富納 野添	古墳	古墳		横穴群
42	43	藤巻	永 藤巻	弥生	埋葬		甕棺
43	45	鬼木製鉄跡	永 樋掛	古代・中世	包蔵地		鉾滓
44	46	かんじゃ寺跡	永 福原	中世	寺社		
45	47	富中ノ坂伽藍さん	吉富 大町	中世	寺社		
46	50	富納	富納 居屋敷	弥生	包蔵地		須玖式・黒髪式土器、石斧
47	51	硯町横穴群	住吉 硯町	古墳	古墳		須恵器
48	52	下峯	住吉 狐塚	弥生	包蔵地		石包丁、黒髪式・野辺田式
49	53	狐塚古墳	住吉 狐塚	古墳	古墳		
50	54	備後塚古墳	住吉 備後塚	古墳	古墳		
51	56	城山	住吉 城山	縄文～古代	包蔵地		蔵骨器・奈良文・御領式・青磁・西平式・野辺田式
52	57	飛熊城跡	住吉 城山	中世	城		中世城
53	58	住吉日吉神社	住吉 北小路	古墳～中世	包蔵地		須恵器・土師器・滑石釜・円面硯
54	59	南住吉古墳	住吉 古閑	古墳	古墳		石棺
55	60	山王宮跡	住吉 北山王	中世・近世	包蔵地		寛永通宝・土師器坏
56	61	東駄飼城	住吉 東駄飼城	古代	包蔵地		蔵骨器
57	62	南山王	住吉 南山王	縄文	包蔵地		縄文土器・石斧・石匙・石鏃
58	63	上住吉	住吉 福島	古墳	包蔵地		土壘・土師器
59	64	池上城跡	住吉 古閑	中世	城		
60	65	飛熊	住吉 城下	古代	包蔵地		経筒
61	67	南住吉	住吉 新屋敷	弥生・古墳	包蔵地		遠賀川式甕棺・須玖式甕棺・野辺田式・土師器
62	68	華厳山広勝寺碑	住吉 北小路	中世	石造物	町	華厳山広勝寺境内
63	69	合志隆岑墓碑	住吉 北小路	中世	石造物	町	華厳山広勝寺境内
64	70	日頭山宣頼寺跡	住吉 福島	中世	寺社		仏像

遺跡番号は「熊本県遺跡地図」(熊本県教育委員会発行)と対応

第 3 節 基本層位

今回発掘調査を実施した竹迫宇土遺跡は、第 c 層を A T 包含層として 11 枚の土層が確認された。

以下、各層ごとに説明を行う。

第 Ⅰ 層 表土層（耕作土）

第 Ⅱ 層 黒色土層

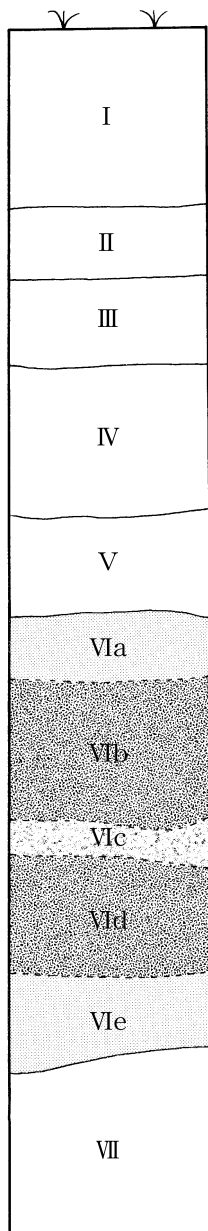
この層は、堆積が薄く耕作等によって削平されており、部分的に確認された。粒子は細かく、サラサラとしている。層厚は、10～15cm である。

第 Ⅲ 層 暗褐色土層

粒子は細かく固くしまる。やや暗く濁った色調を呈するが、アカホヤ火山灰の土壌化した土層であると考

— 126,500m

えられる。縄文時代後期に属する遺物を多量に包含する。層厚は、25～30cm である。



第 4 図 基本土層図

第 Ⅳ 層 黒褐色土層

上層に比べて粒子が細かく、やや粘性を帯びる。層厚は、15～20cm である。

第 Ⅴ 層 暗褐色土層

やや明るい色調を呈し、上層に比して柔らかい土質を呈する。層厚は、30～40cm である。

第 Ⅵ 層 暗褐色～黒褐色土層（ニガシロ）

所謂、ニガシロと呼称される土層である。この土層は、その土質及び土色等の違いから第 a 層～第 e 層の 5 枚に分層できる。

第 a 層は、暗褐色を呈し固くしまりガチガチとした土質を呈し、漸移層である。細かな白斑粒子を含む。

第 b 層は、黒褐色を呈し固くしまりガチガチとした土質を示す。細かな白斑粒子を含む。

第 c 層は、暗褐色を呈し固くしまりガチガチとした土質を示す。上層に比して細かな白斑粒子を多量に含む。始良 T n 火山灰包含層である可能性が指摘できる。

第 d 層は、黒褐色を呈し固くしまりガチガチとした土質を示す。細かな白斑粒子を含む。

第 e 層は、褐色を呈し固くしまりガチガチとした土塊を含む。下層との漸移層であると考えられる。

第 Ⅶ 層 黄褐色粘質土

粒子が細かく粘性が強い。層厚は、40～50cm である。

第 章 調査の成果

第 1 節 縄文時代の遺物

1. 遺構

明確に当該期に属する遺構は認められなかったが、遺物集中部の北側に焼土がまとまって検出されている。遺物集中部は直径約 3 ~ 4 m 程度の範囲にまとまり、周辺では出土量が急減し散在する傾向を示す。このことから、住居址の存在の可能性から遺構の壁面の立ち上がりや床面の検出等を行う目的で、土層確認の小トレンチを数ヶ所設定したが、明確な遺構の痕跡を認めるまでには至らなかった。

2. 土器

当該遺跡では、縄文時代後期に属する土器が 2,087 点出土した。しかし、接合により全体形が復元できる資料は得られていない。その大半は、口縁部 ~ 胴部にかけての破片および底部である。そのため、特徴的な文様を有する資料について図示するにとどめたい。

これらの資料の大半は、施文されている文様とその構成に共通点が認められることや、遺物分布にまとまりが認められることから比較的同一時期に残された、一括性の高い資料である可能性が指摘できる。

掲載した資料については、第 3 表に、出土層位、器種、部位と残存高、内外器面の色調、焼成、胎土混入物、調整・文様等詳細について記載した。

以下、器種ごとに説明を行う。

1) 深鉢形土器 (第 8 図 1 ~ 26、第 9 図 27 ~ 47、49 ~ 51、第 10 図 52 ~ 60、64 ~ 70、第 11 図 72、80 ~ 84)

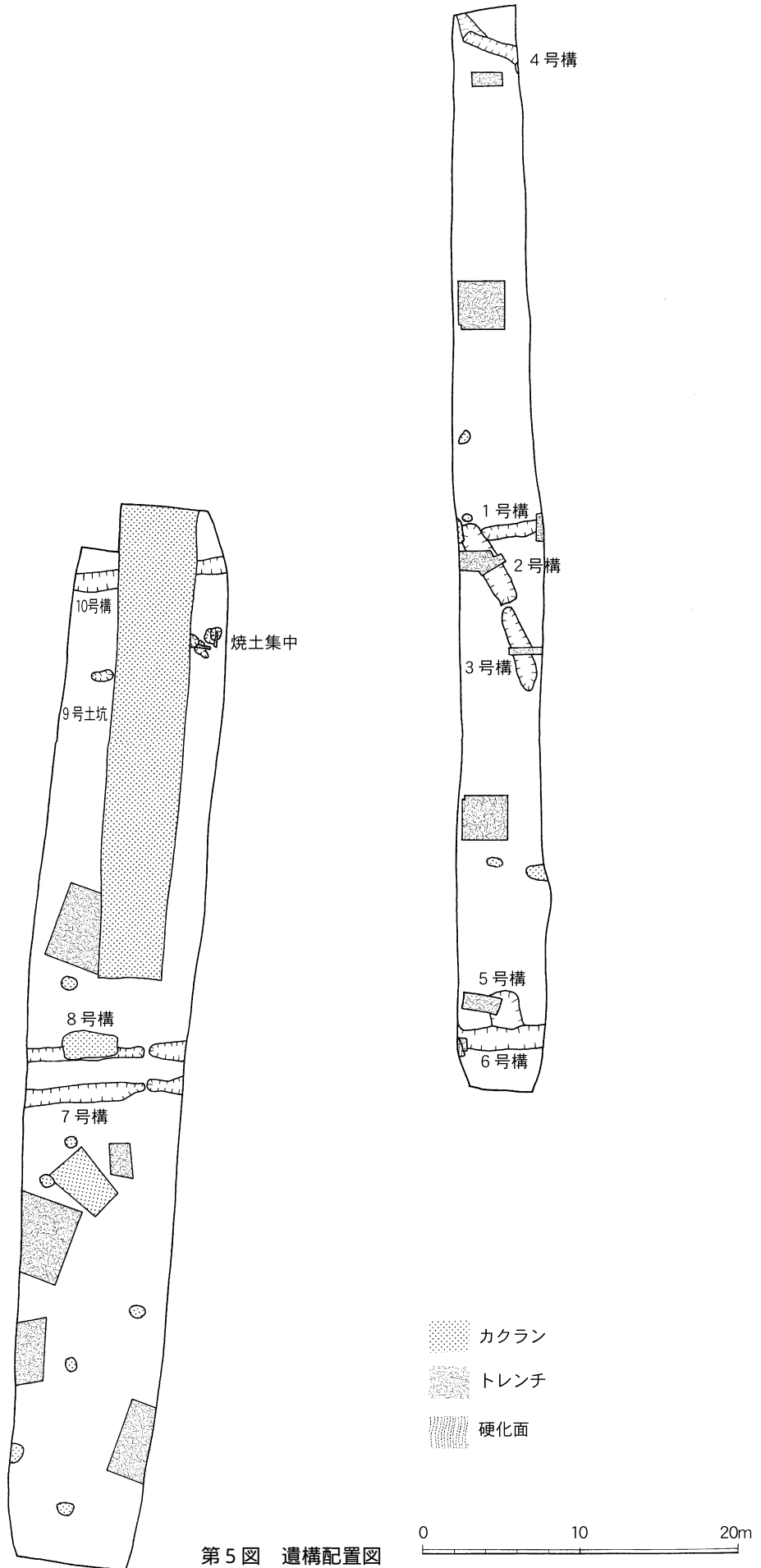
これらの資料は、第 8 図 5、第 10 図 67、第 11 図 84 を除き、内外器面ともよく研磨されている。

口縁部の形態的特徴には、波状をなすもの (第 9 図 27 ~ 37、39、40、42、49 ~ 51、第 10 図 57、59、64、第 11 図 76) やそうでないもの (第 8 図 2、第 9 図 38、41、44 ~ 48、第 10 図 52 ~ 54、66、67、第 11 図 72) がみられる。前者には波状口縁の頂部に原体による V 字状の押圧が施され、口縁部に平行して 2 条の沈線文を施すものが認められる (第 8 図 2、第 9 図 38、41、44 ~ 47、第 10 図 52 ~ 54、60、66、67、第 11 図 72)。また、第 10 図 64 は波状口縁の頂部から垂直方向に 2 ヶ所板状円形の粘土を張り付け中央を押し窪めている。第 10 図 65 にも同様の粘土による浮文が認められる。

文様構成では、縄文、平行沈線文、平行沈線文 + 浮文、平行沈線文 + 細線羽状文、平行沈線文 + 磨消縄文 + 鋸歯状沈線文等バリエーションが認められる。

第 10 図 52 ~ 54 は内外器面とも丁寧に研磨され、施文は口唇部のみに認められる。第 10 図 59 は、波状を呈する口縁頂部の資料である。口縁部に平行して 2 条の沈線文が施されている点では共通するが、頂部に V 字状の押圧は認められず、口唇部と上位の沈線との間に細線羽状文が施される。同様の文様構成をもつ資料に第 10 図 57 がある。波状を呈する口縁部形態は共通し、以下に 3 本の沈線が施され、口唇部と上位の沈線との間及び下位の沈線の下方の 2 ヶ所に細線羽状文を施す。同様の文様を施文する胴部資料として第 10 図 58 がある。第 8 図 2 は、平行沈線文 + 磨消縄文 + 鋸歯状沈線文が認められる資料である。その他の資料は、口縁端部に 2 ~ 3 条の平行沈線文を施すものである。

胴部資料は、頸部の屈曲と胴部の膨らみといった全体形を類推する上で重要な情報を提供している。これらの資料の文様構成は、複数の平行沈線文を施文する点で共通する。また、第 8 図 19、20 は 2 ~ 3 本の沈線にかけて「X」字状文を施す。破片の一部に同様の文様の痕跡が認められるものとして第 8 図 3、15 ~ 18、21、23 がある。特に第 8 図 3 は、磨消縄文が認められ第 8 図 4、6 との共通性も指摘できる。



第5図 遺構配置図

第10図60は特に留意が必要な資料である。内外器面とも丁寧に研磨され、口縁部近くに作り出された稜上に斜方向の縄文を連続して押圧し、羽状文との関連性を指摘できる資料である。

2) 浅鉢形土器 (第9図48、第10図61～63、第11図73～75、77～79)

これらの資料は、前述した深鉢形土器と共通した文様構成が認められるが、資料数が少なくバリエーションはより少ない。

また、深鉢形土器に認められる沈線文より幅があり凹線文とするべきものであろう。施文の在り方では、第10図61、62のように凹線文間に細線羽状文を施すものと、第11図73～75、77～79の凹線文のみを2～3条施すものとが認められる。

3) 注口土器

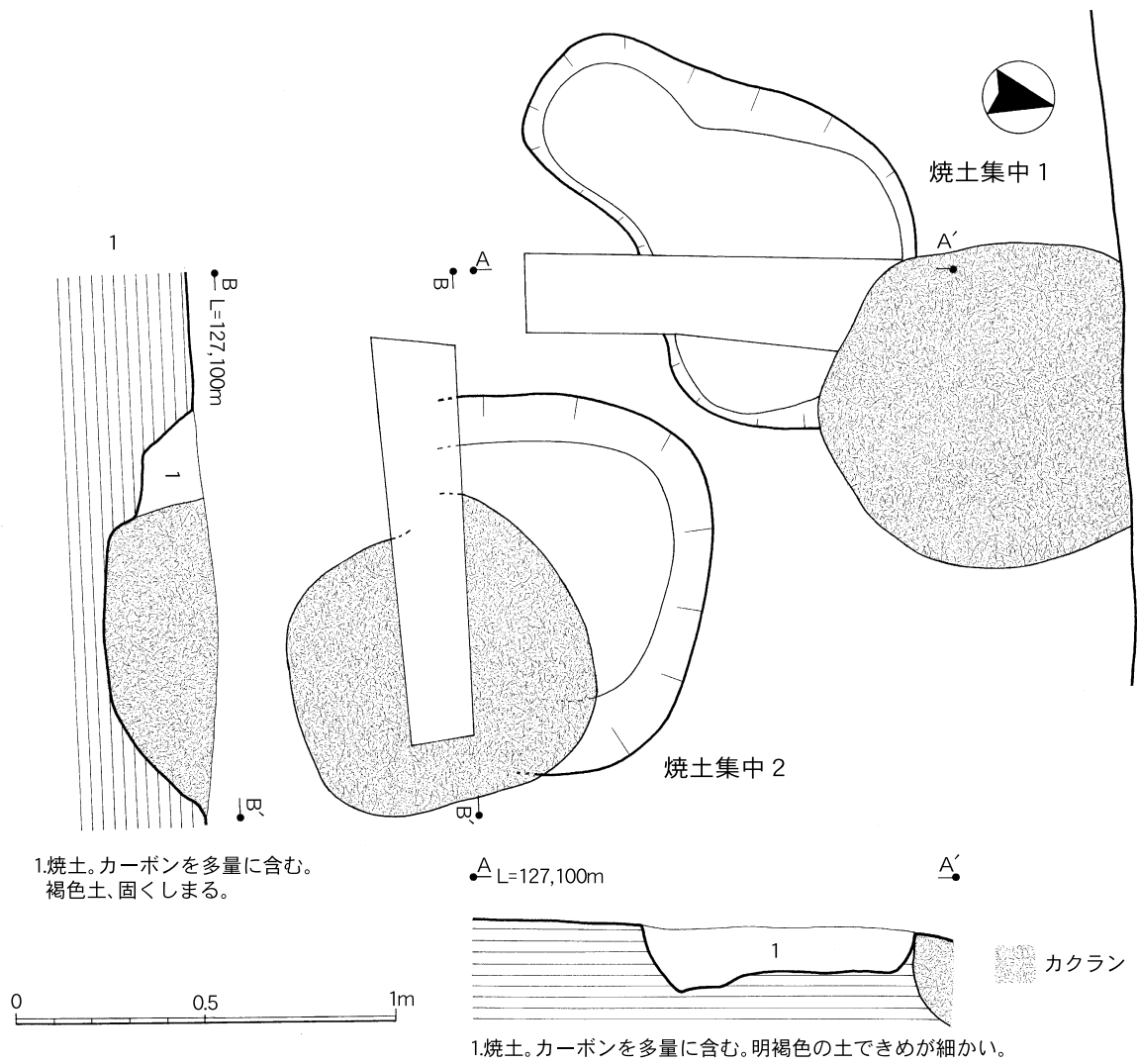
第10図71は、注口土器の注口部の資料である。この器種に属する資料は、抽出できなかったため、全体形等の情報を知ることができない。しかし、当該遺跡で検出された資料の所属時期、分布の在り方等が比較的まとまりを示すことから同様の時間的位置づけが可能であろう。

4) その他の土器

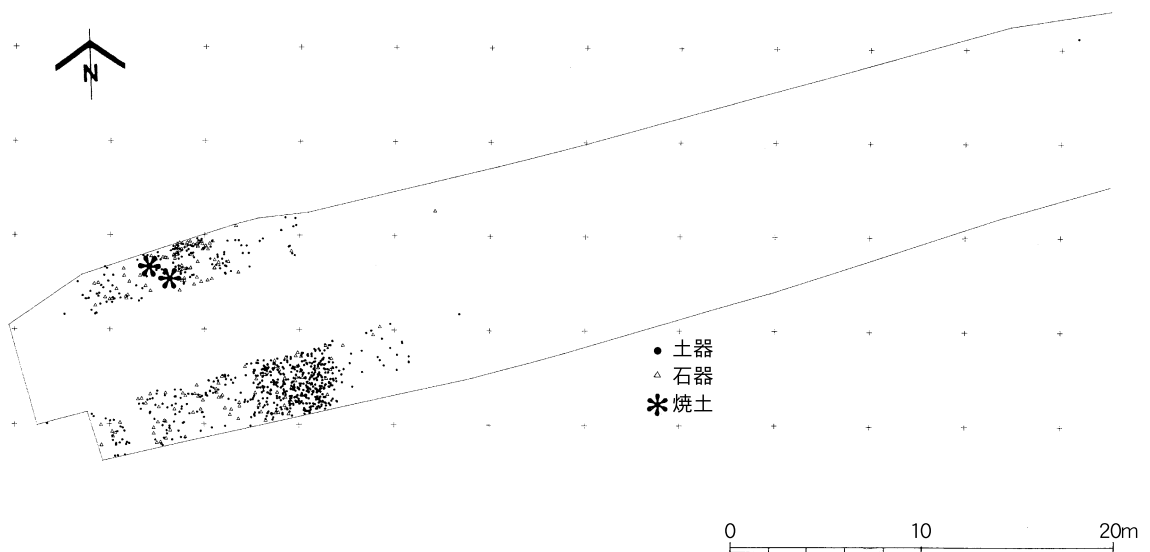
第11図76は、口縁端部が丸みをもち原体刺突による刻みが施されている。北久根山式に比定できる資料であろうか。

第11図84は、内外器面に粗い条痕文を施す。曾畑式系に比定できる資料であろう。

これらの土器の存在は、当該遺跡の所属時期の幅を理解する資料として重要である。つまり、当該地は断続的に利用された痕跡を認めることができ、その利用の中心的時期は後期であろう。



第 6 図 遺構実測図



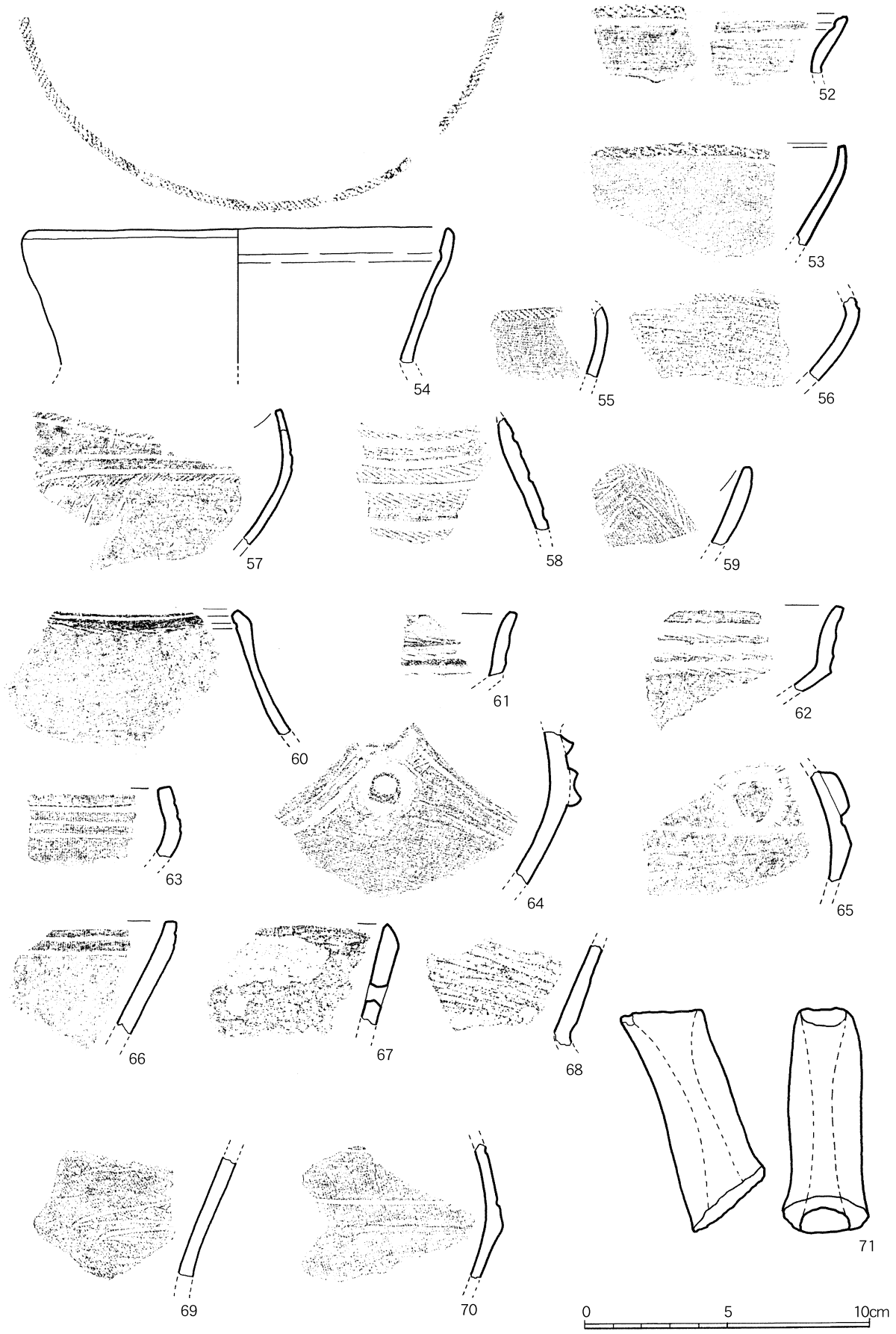
第 7 図 遺物分布図



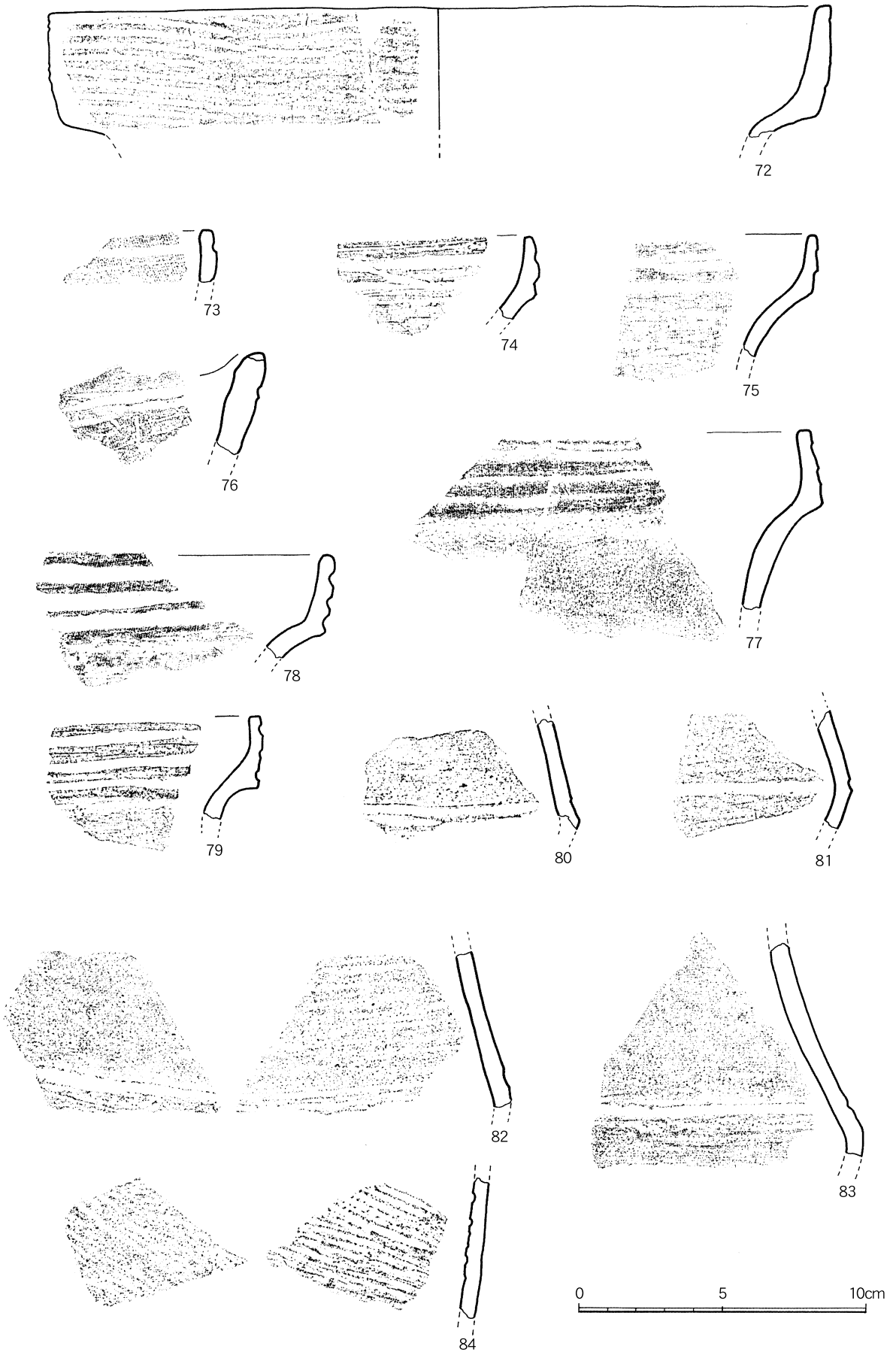
第 8 図 遺物実測図



第 9 図 遺物実測図



第10図 遺物実測図



第11図 遺物実測図

第 3 表 土器観察表

図版 番号	層位	器種	部位	残存高 (cm)	色調		胎土混入物	構成	調整・文様	
					外面	内面			外面	内面
1		深鉢	口縁部	8.7	明黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
2	一括	深鉢	口縁部	2.8	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・磨消縄文・平行沈線文	ミガキ
3		深鉢	胴部	1.4	黒褐色	暗灰黄色	微砂粒・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
4		深鉢	胴部	1.9	褐色	褐色	微砂粒	良好	ミガキ・平行沈線文・刺突文	ミガキ
5	一括	深鉢	胴部	3.9	褐色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ナデ・平行沈線文	ナデ
6		深鉢	胴部	2.3	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文・磨消縄文	ミガキ
7	一括	深鉢	胴部	2.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
8	一括	深鉢	胴部	3.0	褐色	灰黄褐色	微砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
9		深鉢	胴部	2.4	灰黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・長石・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
10		深鉢	胴部	2.9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
11		深鉢	胴部	3.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
12		深鉢	胴部	3.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
13		深鉢	胴部	2.7	灰黄褐色・褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
14		深鉢	胴部	1.7	黄灰色	にぶい黄色	微砂粒	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
15	一括	深鉢	胴部	2.4	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
16		深鉢	胴部	3.2	灰黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
17		深鉢	胴部	2.6	浅黄褐色	浅黄褐色	砂粒・長石・石英・角閃石	普通	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
18	一括	深鉢	胴部	3.5	黒褐色	灰黄色	砂粒・長石・金雲母	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
19		深鉢	胴部	4.7	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文・X字状文	ミガキ
20		深鉢	胴部	4.7	浅黄褐色	浅黄褐色	砂粒・長石・赤褐色粒	良好	ミガキ・平行沈線文・X字状文	ミガキ
21		深鉢	胴部	3.5	灰黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ	ミガキ
22		深鉢	胴部	4.8	灰黄褐色	黄灰色・黒褐色	砂粒・長石・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
23		深鉢	胴部	4.3	にぶい黄色	黒色	微砂粒・長石・金雲母・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
24		深鉢	胴部	5.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・沈線文	ミガキ
25	一括	深鉢	胴部	2.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・石英・角閃石	良好	平行沈線文	ミガキ
26		深鉢	頸部	3.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色・褐色	砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
27	一括	深鉢	口縁部	2.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
28		深鉢	口縁部	3.3	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・雲母・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
29	一括	深鉢	口縁部	4.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・石英	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
30		深鉢	口縁部	4.6	褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
31		深鉢	口縁部	3.7	褐色	黒褐色	微砂粒・長石・石英・雲母	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
32		深鉢	口縁部	2.6	褐色・黒褐色	褐色	砂粒・金雲母・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ・沈線
33		深鉢	口縁部	3.7	褐色	褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
34		深鉢	口縁部	3.3	褐色	にぶい黄褐色	砂粒	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
35		深鉢	口縁部	3.7	にぶい橙色	にぶい橙色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
36		深鉢	口縁部	3.2	黒褐色	黒褐色	微砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
37		深鉢	口縁部	3.7	黒褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・長石・角閃石・金雲母	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
38	一括	深鉢	口縁部	4.0	灰黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
39		深鉢	口縁部	3.6	にぶい黄褐色	灰黄褐色	砂粒・角閃石・石英	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
40	一括	深鉢	口縁部	2.6	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ・沈線
41		深鉢	口縁部	5.3	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
42	一括	深鉢	口縁部	5.4	褐色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
43		深鉢	口縁部	3.7	黒褐色	灰黄褐色	微砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
44		深鉢	口縁部	3.1	黒褐色	黒褐色	微砂粒・長石・角閃石・金雲母	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
45	一括	深鉢	口縁部	5.2	黒褐色	褐色	微砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
46		深鉢	口縁部	4.1	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
47		深鉢	口縁部	5.1	にぶい黄褐色・黒褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
48	一括	浅鉢	口縁部	1.8	にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石	良好	ナデ・平行沈線文	ナデ
49		深鉢	口縁部	4.3	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
50		深鉢	口縁部	5.1	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
51		深鉢	口縁部	4.0	灰黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
52	一括	深鉢	口縁部	2.0	黒褐色	暗灰黄色	微砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・口唇部に縄文	ミガキ・沈線文
53		深鉢	口縁部	3.7	褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・雲母	良好	ミガキ・口唇部に貝殻疑似縄文	ミガキ
54		深鉢	口縁部	4.7	灰黄褐色	黒褐色	微砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・口唇部に貝殻疑似縄文	ミガキ・沈線文
55		深鉢	胴部	2.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・磨消縄文	ミガキ
56	一括	深鉢	胴部	3.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・沈線文・縄文	ミガキ
57		深鉢	口縁部	4.1	にぶい黄褐色	褐色	微砂粒・角閃石・雲母	良好	ミガキ・平行沈線文・細線羽状文	ミガキ
58		深鉢	胴部	4.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・金雲母・長石	良好	ミガキ・平行沈線文・細線羽状文	ミガキ
59	一括	深鉢	口縁部	2.7	褐色	黒褐色	微砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文・細線羽状文	ミガキ
60		深鉢	口縁部	4.4	黒褐色	黒色	微砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・沈線文・細線羽状文	ミガキ・沈線文
61	一括	浅鉢	口縁部	2.2	にぶい黄褐色・褐色	黒褐色	微砂粒	良好	ミガキ・凹線文・細線羽状文	ミガキ
62	一括	浅鉢	口縁部	2.3	黒褐色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・凹線文・細線羽状文	ミガキ
63	一括	浅鉢	口縁部	3.3	にぶい黄褐色	黒褐色	砂粒・角閃石・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
64		深鉢	口縁部	5.4	灰黄褐色・黒褐色	灰黄褐色	微砂粒・角閃石・石英・長石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
65		深鉢	胴部	3.8	にぶい橙色	褐色	微砂粒・長石	良好	ミガキ・沈線文・円形浮文	ミガキ
66	一括	深鉢	口縁部	4.1	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	微砂粒・角閃石	良好	ミガキ・平行沈線文	ミガキ
67		深鉢	口縁部	3.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・石英・角閃石	良好	ミガキ	ミガキ
68		深鉢	頸部	3.3	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ	ミガキ
69		深鉢	胴部	4.1	褐色	にぶい黄褐色	砂粒・金雲母・長石	良好	ミガキ	ミガキ
70		深鉢	口縁部	4.4	にぶい橙色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・角閃石	良好	ミガキ・沈線文	ミガキ
71	一括	注口土器	注口部	7.7	黒褐色	にぶい黄褐色	砂粒・長石・長石	良好	ミガキ	ミガキ
72		深鉢	口縁部	4.4	にぶい黄色	にぶい黄色	砂粒・角閃石・長石	良好	ナデ・条痕	ミガキ
73		浅鉢	口縁部	1.8	褐色	黒褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ・凹線文	ミガキ
74		浅鉢	口縁部	3.1	暗灰黄色	灰黄色	砂粒・長石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・凹線文	ミガキ
75		浅鉢	口縁部	4.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・凹線文	ミガキ
76		深鉢	口縁部	3.6	灰黄褐色	にぶい黄色	砂粒・角閃石	良好	ナデ・条痕	ナデ
77		浅鉢	口縁部	6.5	褐色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ナデ・凹線文	ナデ
78		浅鉢	口縁部	3.7	灰黄褐色	灰黄色	砂粒・長石	良好	ミガキ・凹線文	ヨコナデ
79		浅鉢	口縁部	3.7	灰黄褐色・黒褐色	褐色・にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ・凹線文	ナデ
80		深鉢	胴部	3.8	灰黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・褐色砂粒	良好	ナデ・沈線文	ナデ
81		深鉢	胴部	4.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・赤褐色砂粒	良好	ミガキ・沈線	ミガキ
82		深鉢	口縁部	5.4	褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石・長石	良好	ナデ・沈線	ナデ・沈線
83		深鉢	胴部	7.5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂粒・角閃石	良好	ミガキ・沈線	ヨコナデ
84		深鉢	胴部	4.7	黒褐色	灰黄褐色	微砂粒・長石	良好	条痕調整後ナデ	条痕

3. 石器

竹迫宇土遺跡では、330点の石器が出土した。層位別では、第 1 層～第 3 層にかけて出土している。しかし、その中心は第 1 層上位面から中位面にかけて認められる。

検出された石器に利用されている石材は、黒曜石が圧倒的に多く、その他では安山岩、チャート等があり、石材選択にはバラエティーが認められるが、その利用の在り方には偏りがみられる。また、利用される黒曜石の大半は、乳白色を呈する姫島産で、挟雑物を含まないものが主体を占める。また、西北九州産の漆黒色を呈する良質の黒曜石も利用され、原産地別では比較のまとまった利用傾向が窺える（第 4 表）。

また、黒曜石の石質から A～C 類に細分可能である。A 類は、漆黒色を呈し挟雑物をほとんど含まず透明度の高い良質の黒曜石であり、腰岳産に比定できる資料であろうか。B 類は、漆黒色を呈し挟雑物はほとんど含まないが透明度が低い良質の黒曜石で、牟田産に比定できようか。C 類は、乳白色を呈し挟雑物をほとんど含まない良質の黒曜石であり、礫面の状態から姫島産と考えられる。

第 4 表 石器組成表

器 種	黒 曜 石			チャート	安山岩	蛇文岩	片 岩	その他	計
	A 類	B 類	C 類						
石 鏃	4	2	6	1	2				15
石 匙	1								1
石 錐		1							1
削 器	1								1
楔形石器			1						1
磨製石斧						1			1
打製石斧							1		1
二次加工ある石器	4		2						6
使用痕ある剥片	4	3	2						9
小 計	14	6	11	1	2	1	1	0	36
石 核		1	4						5
剥 片		6	31						37
碎 片	64	17	136	7	17	3		8	252
合 計	78	30	182	8	19	4	1	8	330

図示した石器の器種は、石鏃（第 12 図 1～10）、石匙（第 12 図 12）、削器（第 12 図 13）、石錐（第 12 図 11）、磨製石斧（第 13 図 20）、打製石斧（第 13 図 19）、二次加工ある石器（第 12 図 15、16）使用痕ある剥片（第 12 図 14、17、18）である。

以下、器種ごとに説明を行う。

1) 石鏃

当該遺跡において石鏃は 15 点出土し、うち 10 点を図示した。欠損部位別では、完形 6 点、先端部欠失 3 点、片脚部欠失 1 点、先端部及び両脚部欠失 1 点、左（右）側 1/2 残存 1 点、脚部末端のみ残存 3 点である。これらの石器に利用されている石材は、黒曜石が卓越し 80% を占める。黒曜石では、A 類及び C 類が主体的に利用されている。

これらの石器の形態的特徴は、第 12 図 1、4、5 のように左右両側縁に屈曲する角をもつものが認められる。この種の形態は、従来「五角形鏃」あるいは「ジェット機鏃」と呼称されていたものであろう。また、第 12 図 3、5 は素材剥片の主要剥離面が観察される。その在り方から縦長剥片を素材とすることが理解され、黒曜石 A、B 類と縦長剥片剥離技術との関係を示唆するものであろう。

2) 石匙

石匙に分類できる資料は、第 12 図 12 の 1 点のみである。調整加工は、つまみ部と石器先端部に施され、素材剥片の形状を大きく変更せず作り出されている。素材剥片の形状は、末端部でノの字状に曲がる特徴を有

する縦長剥片である。表面に礫面を残すが、表裏面に観察される剥離面の方向は同一である。この素材剥片の末端部側をつまみ部側に設定し、作り出されている。

3) 削器

削器に分類できる資料は、第12図13の1点のみである。素材剥片の形状は縦長剥片であり、表裏両面で観察される剥離面の方向は同一軸上にある。両側縁に細かな調整加工が施される。

4) 石錐

石錐に分類できる資料は、第12図11の1点のみである。石器の基部側及び錐部先端を欠失している。表裏両面に残された剥離面から素材剥片の形状は、縦長剥片と考えられる。また、表裏面で観察される剥離面の方向は、同一である。

5) 石斧

石斧として分類できる資料は、2点出土した。第13図19は打製石斧である。石材は、片岩である。縁辺全周に調整加工を施し形状を整えている。形態的には、短冊型に分類できる資料である。

第13図20は、蛇文岩製の磨製石斧である。刃部の一部を欠失している。研磨は表裏両面とも入念に施されているが、縁辺部には部分的に製作時の剥離痕が認められる。

6) 二次加工ある石器

二次加工のある石器は6点出土し、うち2点を図示した。第12図15、16とも縦長剥片を素材とし、裏面側に加工を施す。16は、ノッチ状を呈する加工が施される。両者とも、表裏両面の剥離面の方向は同一である。

7) 使用痕ある剥片

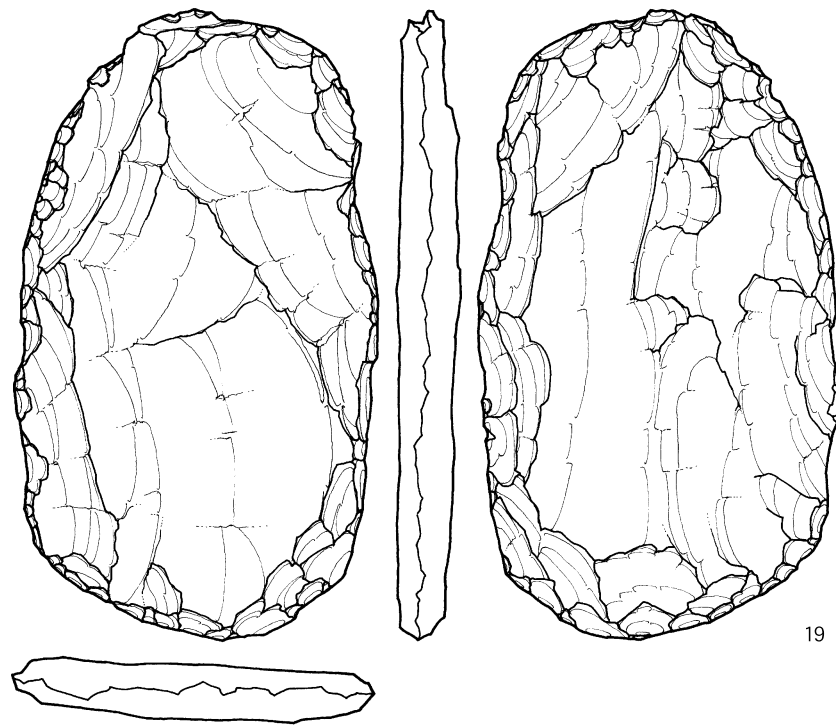
使用痕ある剥片は9点出土し、うち3点を図示した。第12図14は、表裏両面に観察される剥離面の方向は概ね同一軸上にある縦長剥片である。使用痕は、両側縁に観察される。第12図17は縦長剥片を素材とし、その使用痕は両側縁に観察される。先端部を欠失している。第12図18は打点部側及び先端部側を欠失する縦長剥片である。使用痕は両側縁に観察され、表裏両面の剥離面の方向は同一である。

第5表 石器計測表

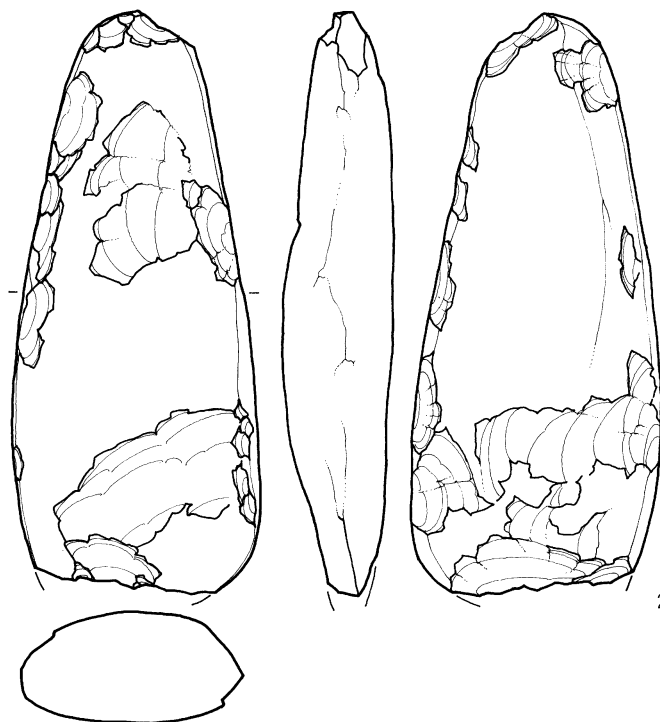
番号	器種	石材	計測値				グリッド、層登録番号	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
1	石 鏃	黒曜石 A	37.0	18.0	5.0	1.4	、1646	完形
2	"	黒曜石 C	24.0	14.0	5.0	0.9	、638	完形
3	"	黒曜石 B	25.0	13.0	3.0	0.5	、148	完形
4	"	黒曜石 B	19.0	15.0	5.0	0.7	、1837	完形
5	"	黒曜石 A	20.0	18.0	3.0	0.9	D-13、一括	先端部欠失
6	"	黒曜石 C	27.0	14.0	0.6	0.9	、236	片脚欠失
7	"	安山岩	24.0	14.0	5.0	1.2	、994	完形
8	"	安山岩	34.0	19.0	5.0	1.5	、2203	完形
9	"	黒曜石 C	13.0	16.0	3.0	0.4	、200	先端部欠失
10	"	黒曜石 C	14.0	13.0	0.4	0.4	、892	先端部欠失
11	石 錐	黒曜石 B	22.0	23.0	7.0	1.9	、1452	基部、錐部先端欠失
12	石 匙	黒曜石 A	50.0	12.0	5.0	2.5	、2253	完形
13	削 器	黒曜石 A	71.0	14.0	10.0	7.2	、984	
14	使用痕ある剥片	黒曜石 A	43.0	13.0	6.0	3.1	、2382	
15	二次加工ある石器	黒曜石 A	27.0	23.0	7.0	2.9	、493	
16	"	黒曜石 A	44.0	17.0	9.0	5.4	一括	
17	使用痕ある剥片	黒曜石 A	27.0	21.0	5.0	2.5	、1476	
18	"	黒曜石 A	20.0	25.0	5.0	1.7	、1843	
19	打製石斧	片岩	125.0	71.0	13.0	146.0	、585	
20	磨製石斧	蛇文岩	116.0	47.0	22.0	171.0	、2397	



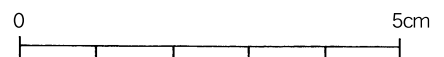
第12図 遺物実測図



19

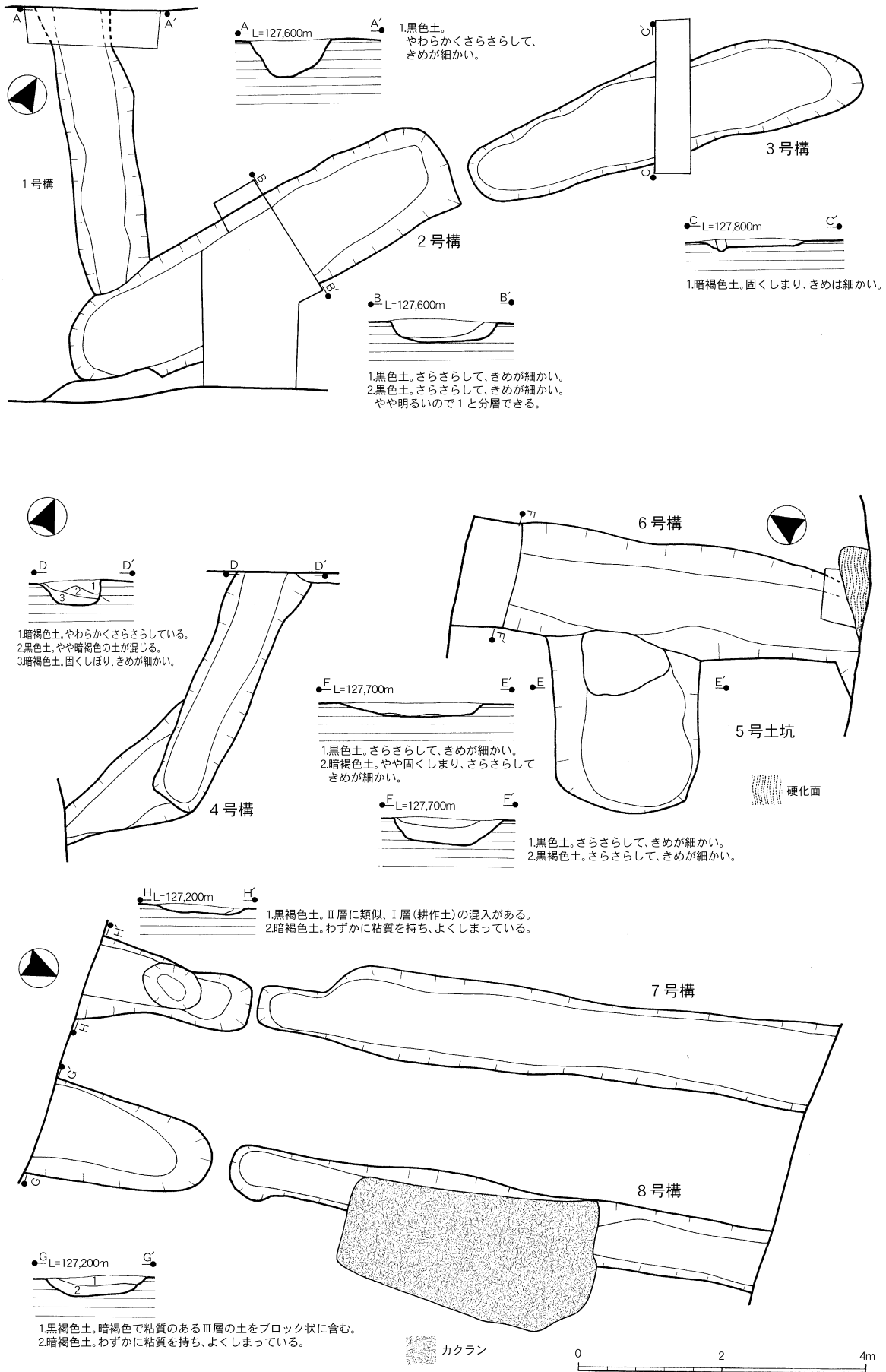


20



第13図 遺物実測図

第 章 調査の成果



第14図 遺構実測図

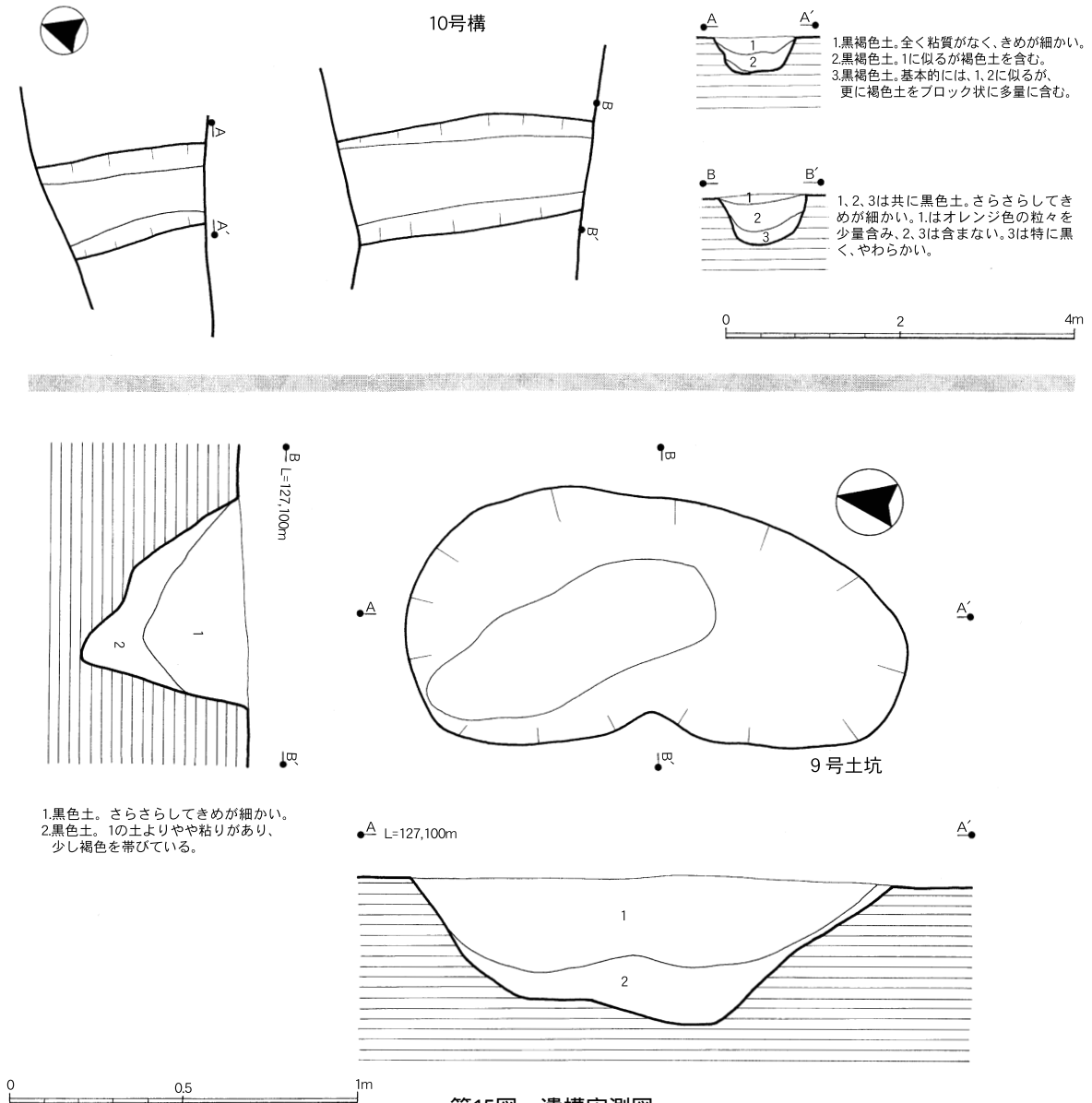
第 2 節 その他の時代の遺構と遺物

当該遺跡において、所属時期が不明な遺構が検出された。溝状遺構及び土坑である。当地は、現在竹迫宇土遺跡の所在する台地をほぼ東西方向に分断し、県道熊本大津線が走る。今回の調査は、この県道拡幅に伴い南北両側で狭長な調査区を設定し実施した。その結果、南北両調査区において対応する溝状遺構が検出された（第 5 図）。

その在り方は、南北方向にほぼ等間隔に並行する状態で確認される。これらの遺構の埋土は、サラサラとした黒色土で共通した状況が窺える。当地の表層地質がクロボク土壌であることから、遺構の所属時期は比較的新しいものと考えられよう。

しかし、これらの遺構の時期を明確にする遺物等は出土していないため、詳細な時期決定が行えない。ただし、当該遺跡の所在する台地を道路が大きく削り込み比高差が認められ、同様に溝状遺構も南北に分断されている。このことから、道路が現状のように台地との比高差をもって作られた時期より古いものと考えられる。

また、ほぼ同一方向に等間隔で認められることから、畑地等耕作地に伴う境界である可能性が指摘できよう。



第 章 総括

竹迫土遺跡において検出された遺物のなかで最も数量的に多いのは、縄文時代後期に属する資料である。

今回の発掘調査において、同時期の遺構等が検出されず、出土した土器についても接合による個体復元の割合が低い。このことは、当該地に存在する遺跡の広がりといった範囲と調査区の面積や位置関係によるものであろう。

つまり、現在を生きる我々の生活の利便性を高めるために実施される種々の開発行為によって、遺跡全体の中で破壊を余儀なくされる範囲について、止むを得ず記録保存されることになる。今回、当該地において実施した発掘調査とその結果に基づく報告書の作成には、そうした意味がある。このように、遺跡全体の範囲のうち部分的に発掘調査を実施し、記録保存することにより周囲に残された遺跡の様相を断片的にはあるが理解されることは意義のあることと考える。

そこで、出土した遺物について検討を行い、当該遺跡のまとめを行う。

当該遺跡において出土した土器資料は、前述したように接合による器形等の個体復元の割合が低い。しかし、それぞれの器種ごとや部位別に、形態の特徴や文様構成等を観察することにより、その所属時期や型式といった情報を得ることができる。出土した資料の器種組成は、深鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器である。これらの資料の口縁部形態は、波状を呈するものとそうでないものとがみられる。また、前者には波状頂部を原体で押圧する特徴を示すものである。この部位の文様構成は、前者では頂部に施された押圧痕を中心に口縁に沿って平行する2～3本の沈線文が施される。後者では、口縁に沿って平行する2～3本の沈線文が施され、両者とも共通した要素が認められる。胴部資料は、頸部から胴部にかけてくびれ膨らみをもつ胴部形態へと移行する状況が観察される。これらの文様構成では、縄文、平行沈線文、平行沈線文+浮文、平行沈線文+細線羽状文、平行沈線文+磨消縄文+鋸歯状沈線文等バリエーションが認められる。

これらの土器資料にみられる形態の特徴や文様構成から、磨消縄文系の太郎迫式土器と細線羽状文系の三万田式土器に比定できるものと考えられる。このことから当該遺跡の所属時期と時間幅については、縄文時代後期後半の2型式間にまたがるものと類推される。しかし、当該期に属する遺構等が検出されておらず両者の時間的先後関係あるいは並行関係等の詳細については明確にし得ない。ただし、両者の関係について留意すべき資料が検出されている。第10図60の資料である。この資料は、縄文による疑似羽状文が施文される。このことは、両土器型式が共伴する可能性が高いことを示唆するものであろう。

また、当該遺跡から出土した石器資料は、土器資料に比して多くない。しかし、その石材利用の在り方は素材剥片の形状から類推される剥片剥離技術の特徴と併せて興味深い資料である。

つまり、出土した資料のうち黒曜石の占める割合が約87.9%と圧倒的に高く、その中でも黒曜石A、C類が卓越する。この両石材は、石鏃では拮抗した状況が窺えるが、その他の器種では黒曜石A類が卓越する。黒曜石A類を利用する石器の剥離構成は、表裏両面ともほぼ同一方向かあるいは同一軸上にあるといった特徴を有し、縦長剥片を意識的に生産していることが理解される。しかし、当該遺跡からは同類に属する石核は出土せず、製品及び碎片のみである。このことから、素材剥片の形状による搬入も考えられよう。この種の剥片剥離技術は、縄文時代後期に位置づけられる「鈴桶技法」の範疇で捉えられるものと考えられよう。

【参考文献】

- 合志町教育委員会 1990 『合志町史』
- 清田 純一 1998 「縄文後・晩期考 中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について」『肥後考古』11
- 泉 拓良 1989 「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
- 乙益 重隆 1965 「縄文文化の発展と地域性 九州西北部」『日本の考古学』第 巻 河出書房新社
- 賀川 光夫 1965 「縄文文化の発展と地域性 九州東南部」『日本の考古学』第 巻 河出書房新社
- 島津 義昭 1989 「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
- 山崎 純男・島津 義昭 1981 「4. 晩期の土器 九州の土器」『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
- 高橋 信武 1981 「片粕系土器の細分に向けて」『赤れんが』創刊号 赤れんが出版会
- 富田 紘一 1983 「太郎迫遺跡の縄文土器(1)」『肥後考古』4
- 古森 政次 1994 『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第144集 熊本県教育委員会
- 松本 直子 1994 「認知考古学的視点から見た土器様式の空間的変異 - 縄文時代後晩期黒色磨研土器様式を素材として - 」『考古学研究』第42巻第4号
- 濱田 彰久 1997 『庵ノ前遺跡』熊本県文化財調査報告第160集
- 「新・熊本の歴史」編集委員会編 1979 『新・熊本の歴史1 原始』熊本日日新聞社
- 竹内 理三編1991 『角川 日本地名大辞典 43 熊本県』角川書店

写真図版



A区完掘状況



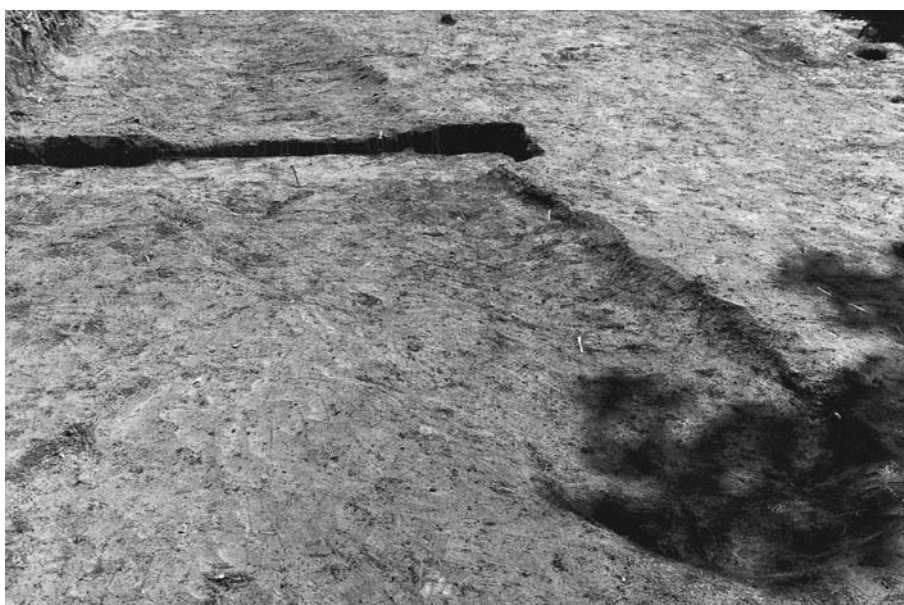
B区完掘状況



1号構



2号構



3号構



4号構



5号土坑



6号構



7号構



8号構



9号土坑



10号構
北西 南東



10号構
南東 北西



焼土集中1



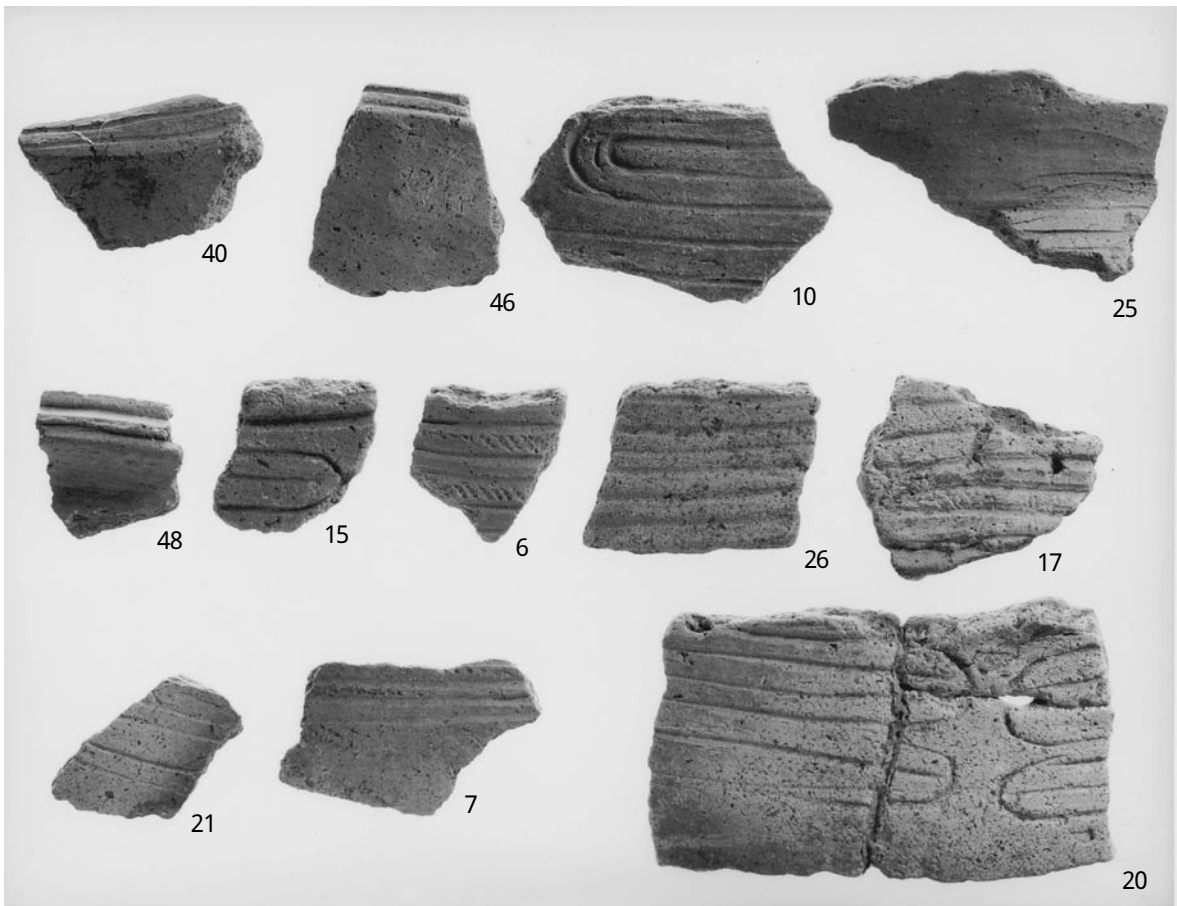
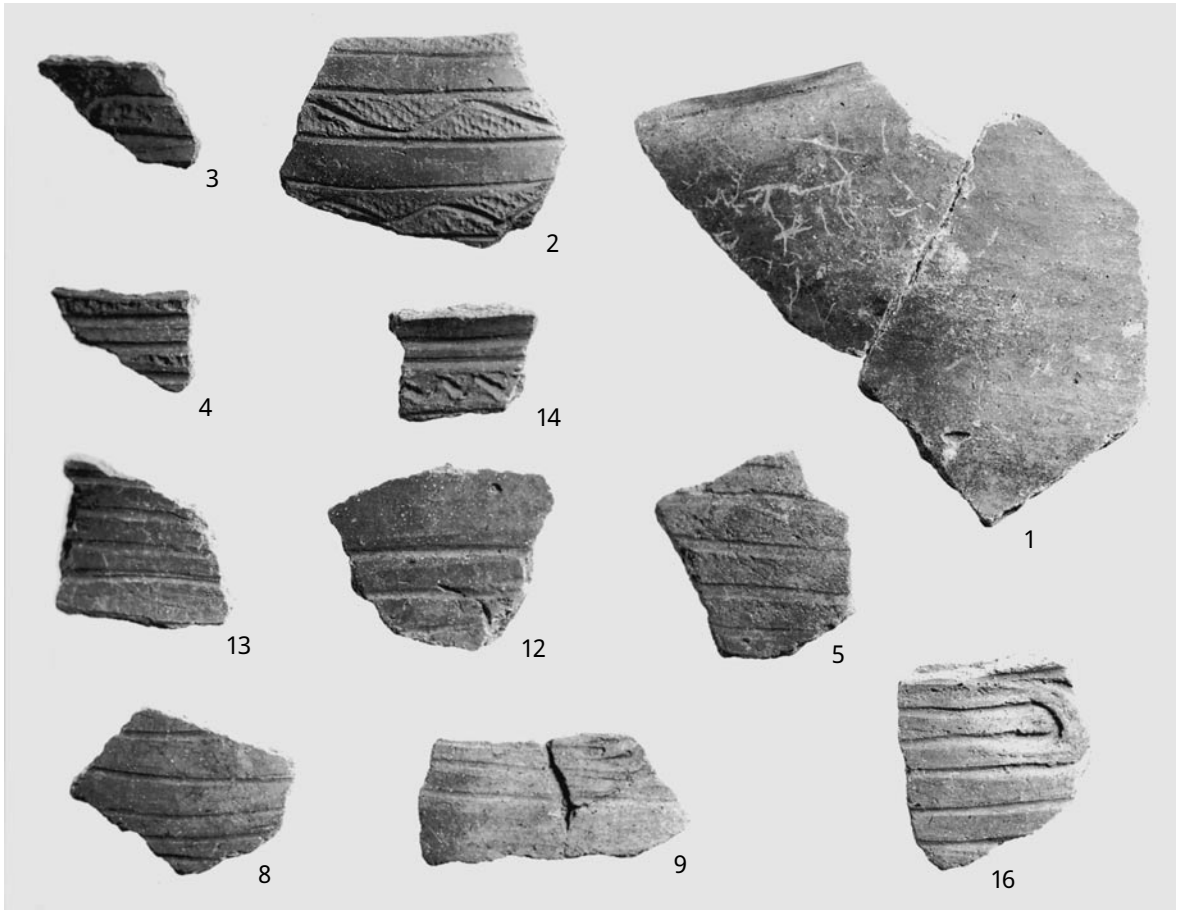
焼土集中 2

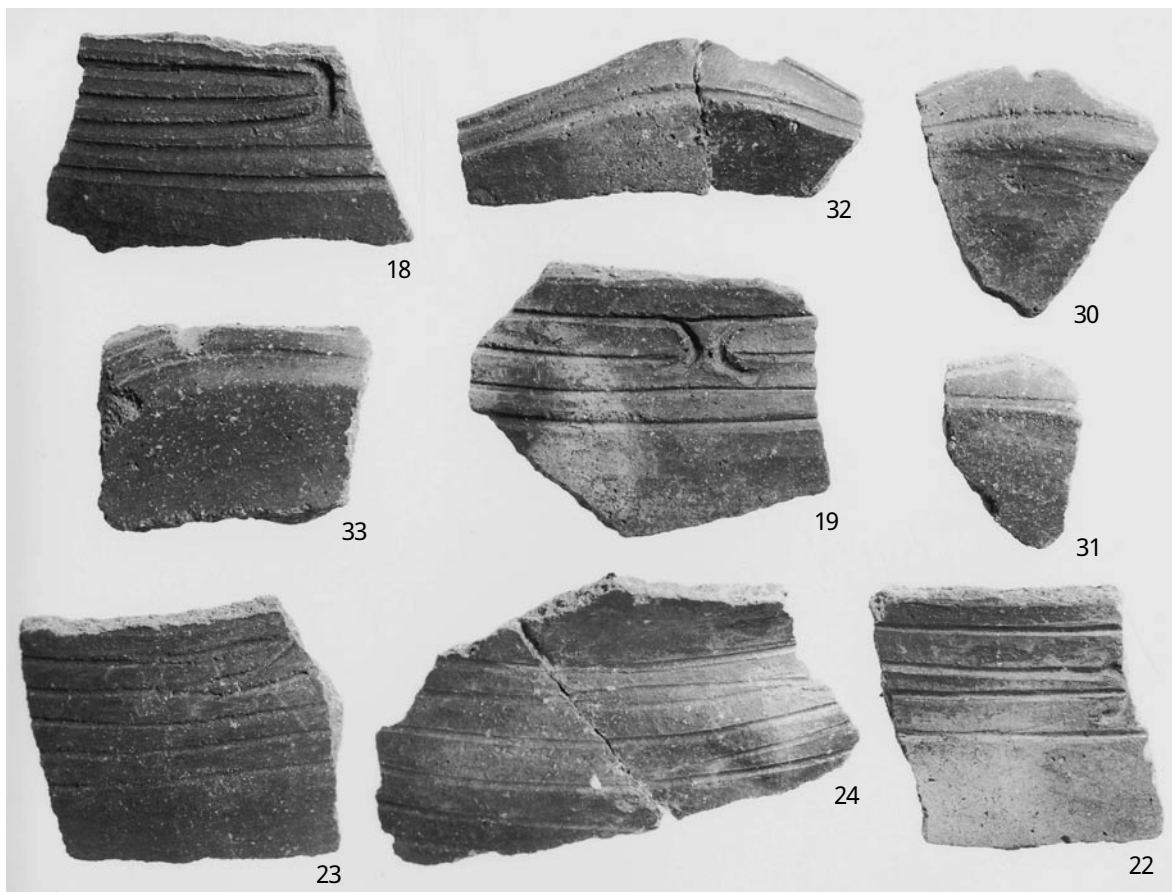
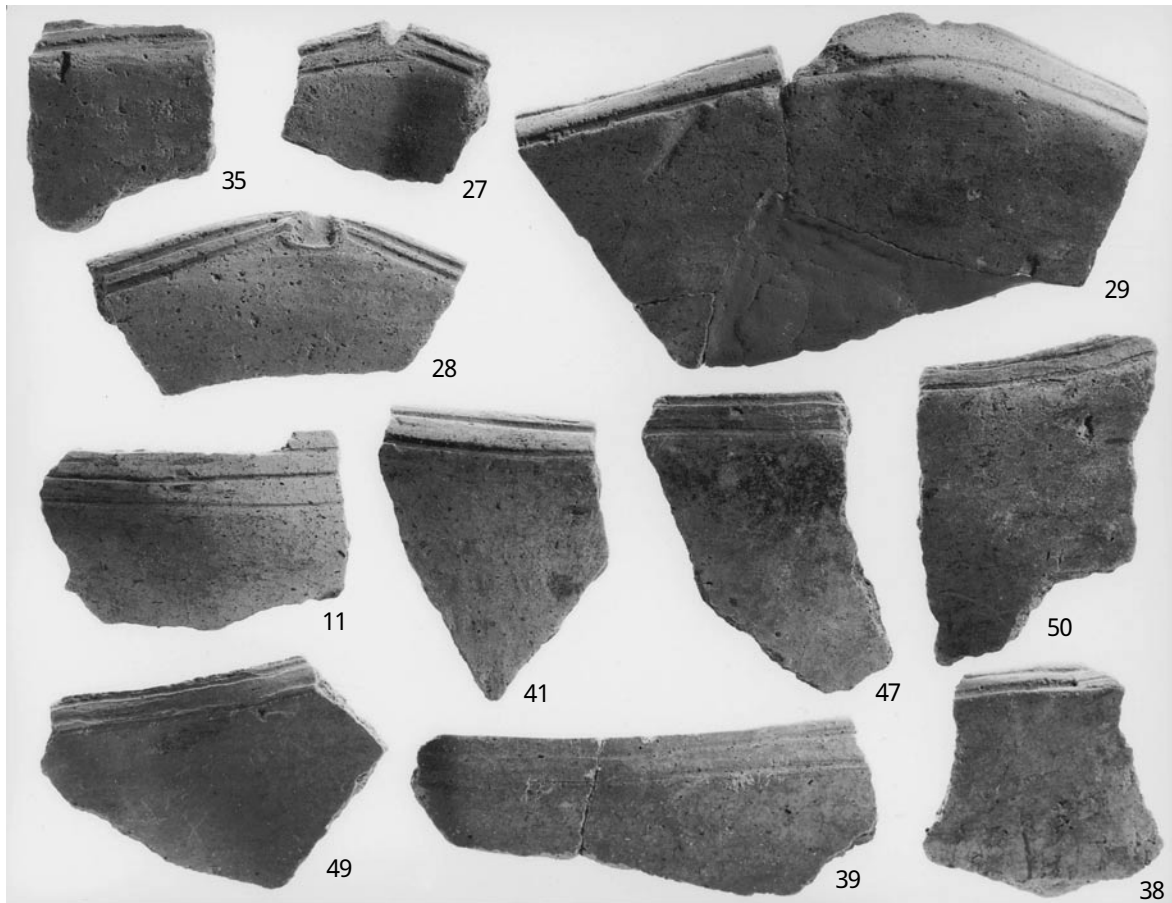


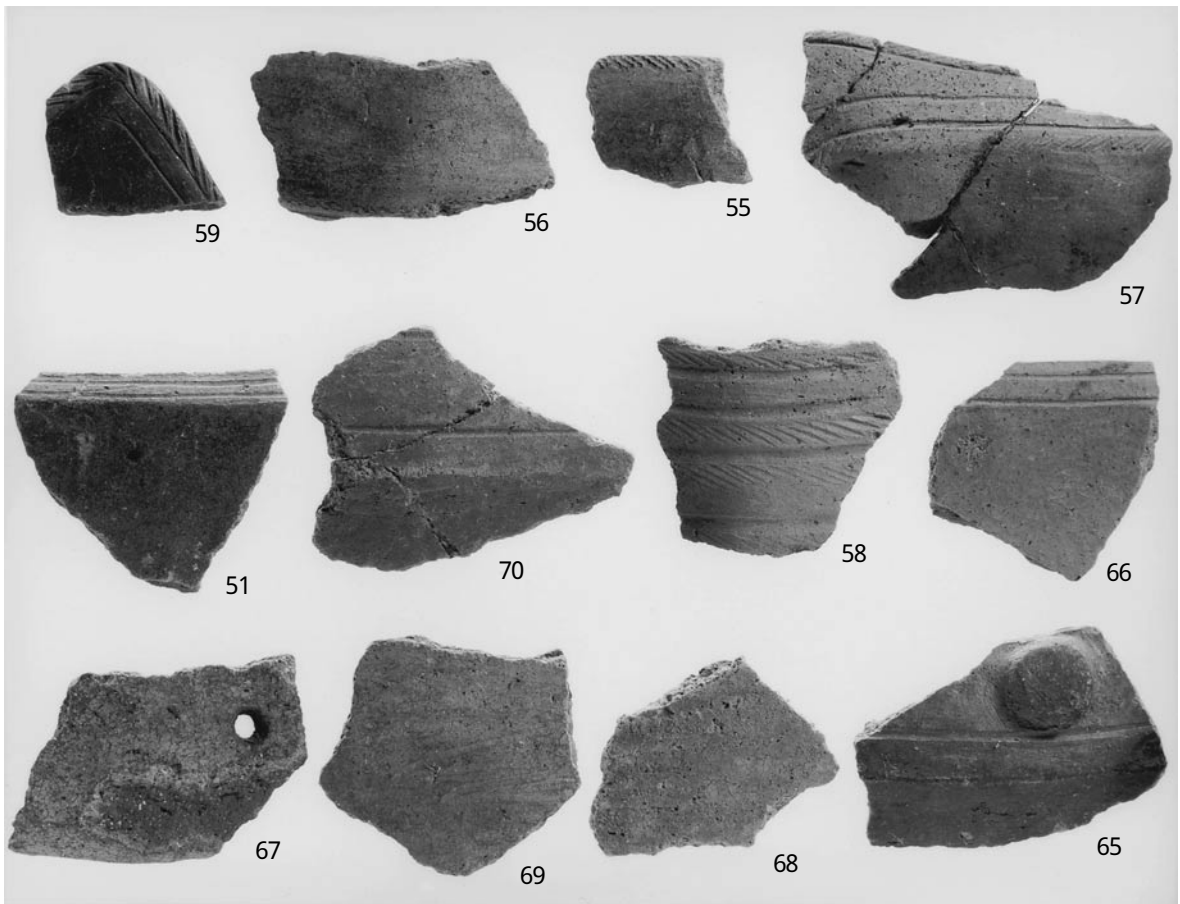
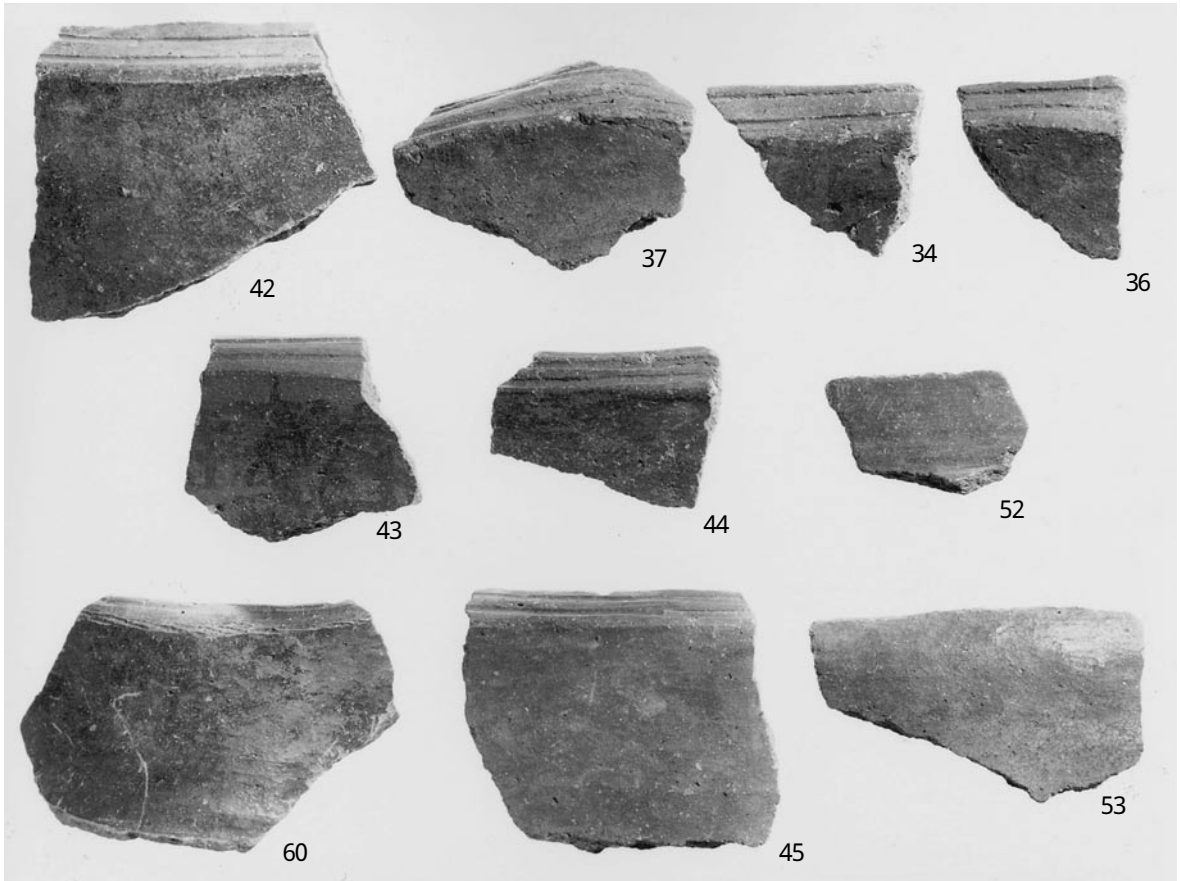
焼土集中 1
完掘状況

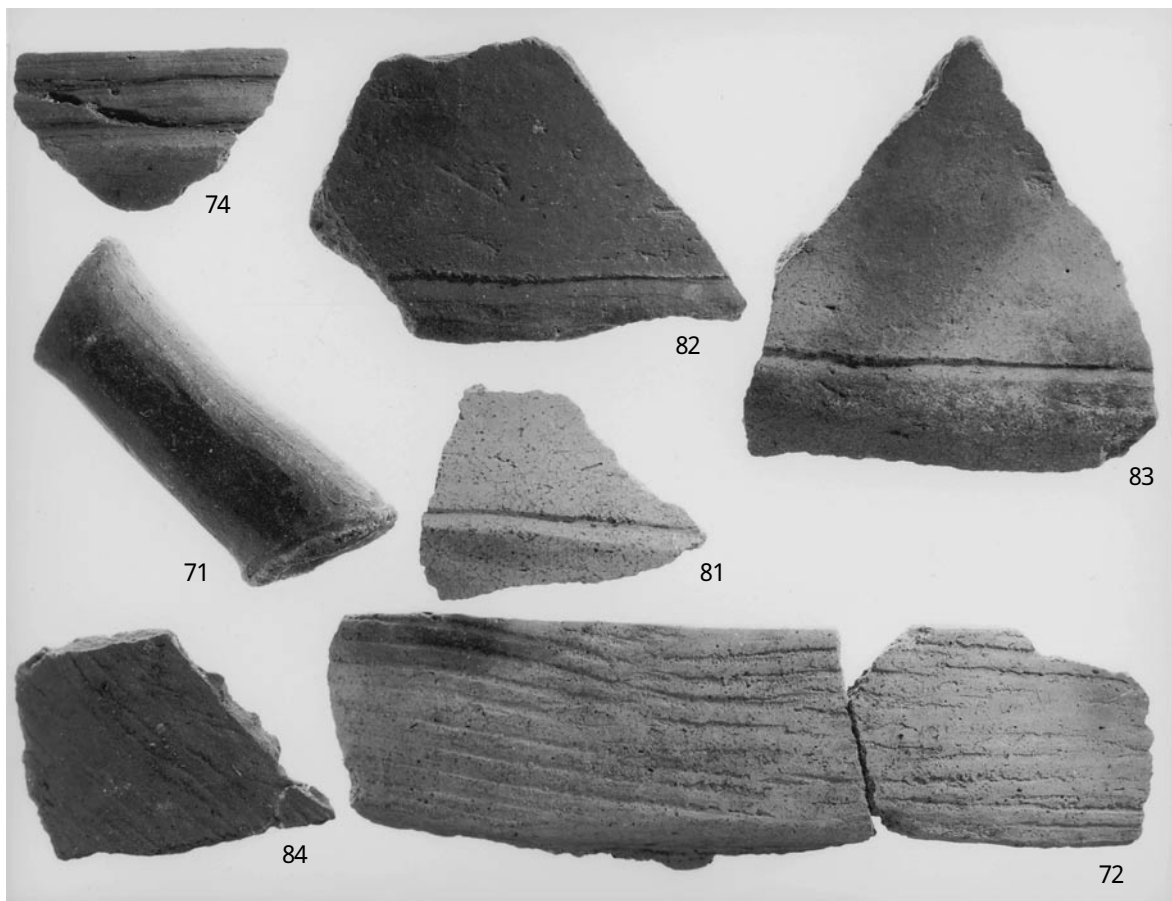
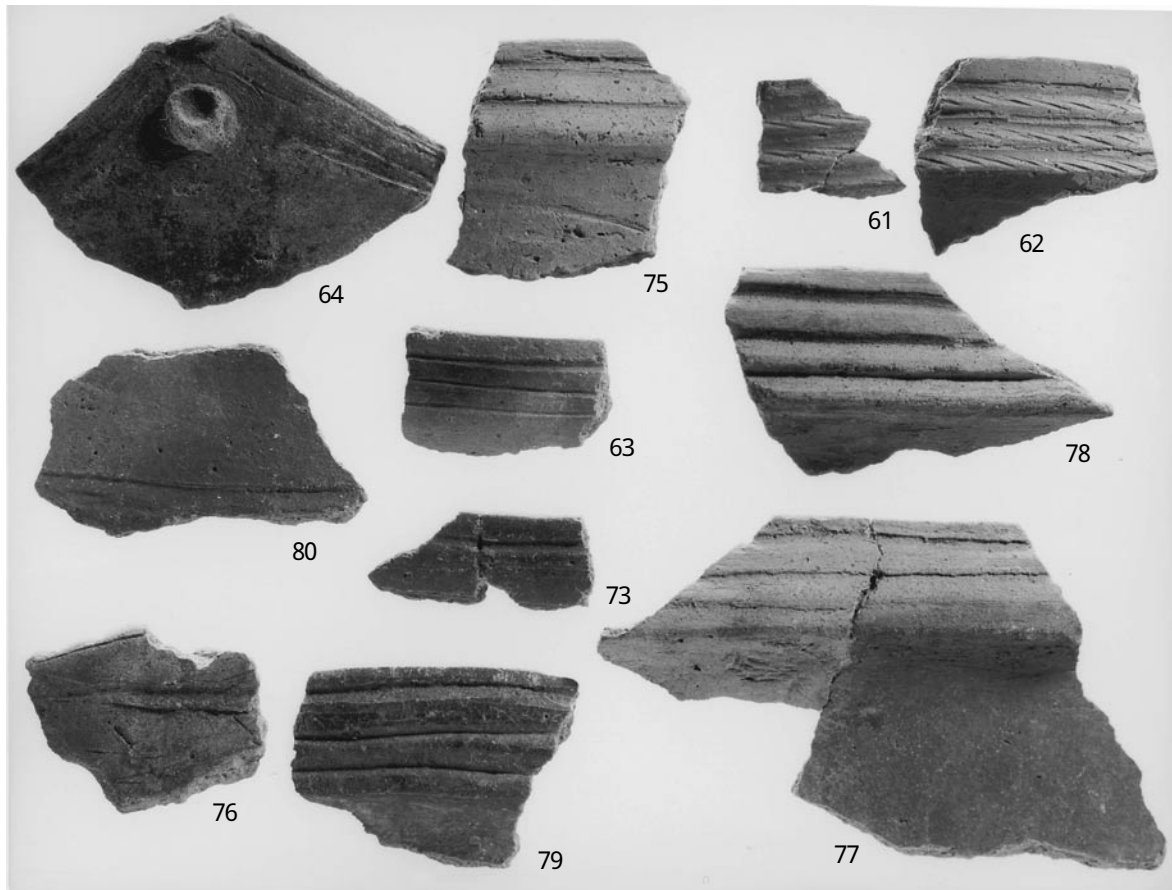


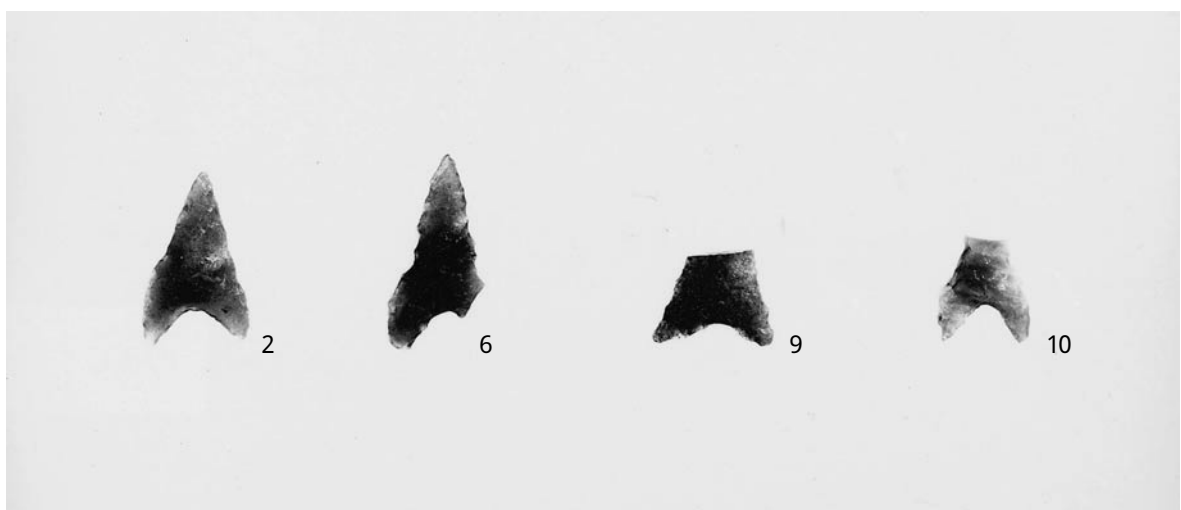
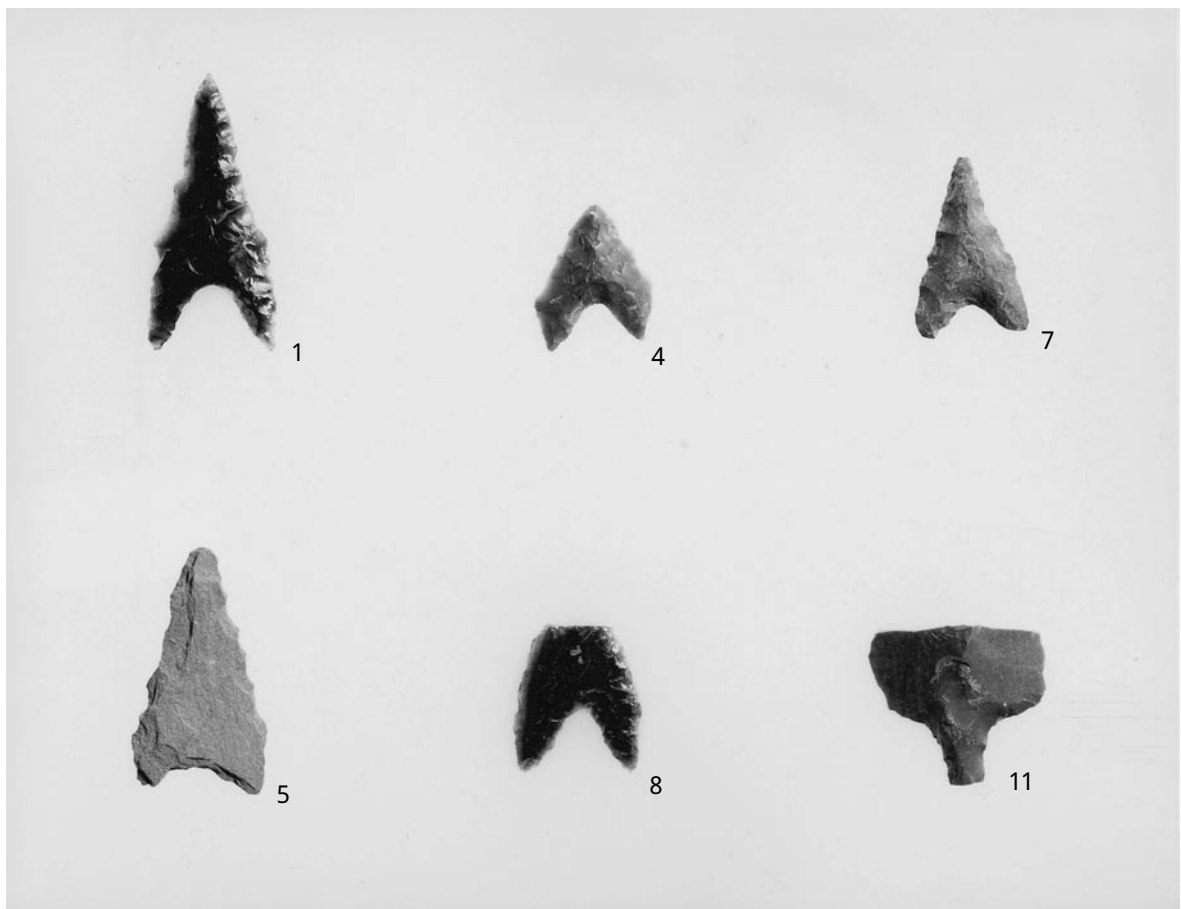
焼土集中 2
完掘状況

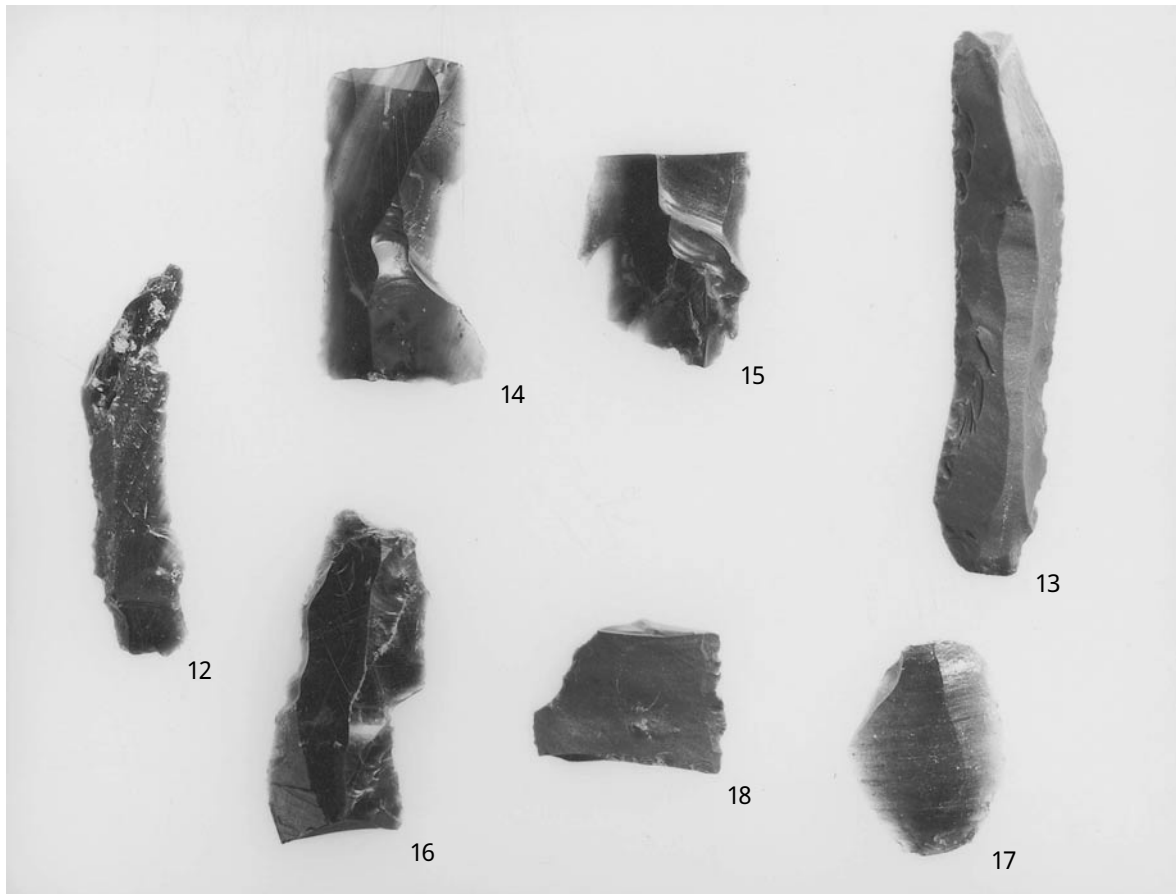












報告書抄録

書 名	竹迫宇土遺跡
副 書 名	県道熊本大津線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第192集
編 著 者 名	村崎 孝宏
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所 在 地	熊本市水前寺 6 丁目18- 1
発行年月日	平成12年12月28日

所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
竹迫宇土遺跡	熊本県菊池郡合志町竹迫宇土	43405 : 020	1997.03.01 ~ 1997.06.30	1,600m ²	道路建設

遺 跡 名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹迫宇土遺跡	縄文時代前、後期	焼土集中部	曾畑式系土器 三万田式系土器 石器類	

付 編

堀川眼鏡橋

- 堀川（促進）都市小規模河川改良事業に伴う文化財調査 -

目 次

例 言

挿図目次

図版目次

調査の概要.....	1
調査に至る経緯.....	1
地理的環境.....	1
歴史的環境.....	1
遺跡の概要.....	1
調査の方法と経過.....	1
遺跡の概要.....	2
まとめ.....	2

例 言

1. この付編は、堀川（促進）都市小規模河川改良事業に伴い、事前に実施した文化財調査の調査報告である。
2. 調査を実施した遺跡は、熊本県菊池郡西合志町須屋に所在する堀川眼鏡橋で、熊本県菊池土木事務所の依頼を受け熊本県教育委員会が実施した。
3. 当該遺跡の調査は平成9年度に実施した。その報告は平成12年度に行うこととし、「竹迫宇土遺跡」調査報告の付編として掲載した。
4. 地形図は、建設省国土地理院発行の1/25,000を使用した。
5. 現地での実測作業については、(株)パスコ熊本営業所に委託した。
6. 実測図は1/20で作成し、1/80で掲載した。
7. 付編の執筆は、村崎が担当し、 - ii 「遺跡の概要」については、熊本県文化課文化係指導主事富岡重則の助言を得た。
8. 付編の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、村崎が担当した。

挿 図 目 次

第1図 立面図.....	3
第2図 立面図・展開図.....	4
第3図 平面図.....	5
第4図 堀川橋周辺.....	6

図 版 目 次

図版1.....	9
図版2.....	10
図版3.....	11

調査の概要

i 調査に至る経緯

熊本県教育庁文化課は、平成7年10月26日付け教文第1094号で熊本県菊池土木事務所あて「平成8年度予定の公共事業照会」を行い、平成7年11月17日付け菊土第1036号により回答された。

提出された内容について、遺跡台帳との照合及び現地踏査を実施し、その結果を菊池土木事務所長あて通知した（平成8年5月22日付け教文第373号）。当該事業予定地については、文化財（建造物）「堀川眼鏡橋」に該当するため、文化財保護の観点から工事に際してその取扱い等について熊本県教育庁文化課と協議が必要となる旨通知した。

このことを受け熊本県教育庁文化課と熊本県菊池土木事務所と協議を重ね、現状での保存は困難であり解体し架け替えを行うこととなった。そのため記録保存を行うこととし、熊本県教育庁文化課は平成9年6月27日～7月31日に現地における調査を実施した。

報告書作成については、年度内に遺跡全体を取りまとめることはできないと判断し、平成11年度に図面の整理を行い、報告書印刷は平成12年度に行うこととした。

ii 地理的環境

堀川眼鏡橋の所在する西合志町は、熊本市の北部に位置し、東は合志町、菊陽町、西は植木町、北は泗水町と境を接する。東には阿蘇外輪山の一角をなすツームシ山（1,064m）、鞍岳（1,186m）、矢護山等が連なり、これらの山塊の西側には阿蘇の大規模な火山活動による多くの噴出物が広範囲に堆積し、合志台地を形成している。この合志台地は、火山灰土壌のため透水性が強く、雨水は地下に浸透し地表の流水がほとんどみられないため起伏の少ない傾斜の緩やかな地形を形成している。

当該地域は、同台地の西端に位置し標高60～100mを測る。北部の塩浸川や上生川が台地に浅く広い谷を刻んでいる。

地質は、前述したように阿蘇起源の火山噴出物が厚く堆積した火山灰土壌である。熊本市との境界沿いには、堀川が東西に貫流する。同河川は、菊池郡南部、白川右岸の洪積台地を流れ、菊池郡菊陽町原水から同郡合志町幾久富の南部、西合志町須屋を経て、熊本市鶴羽田で坪井川に注いでいる。流路延長18.8km、流域面積43.8km²である。堀川眼鏡橋が所在する須屋は、同町南西端に位置する。

iii 歴史的環境

西合志町須屋には、堀川が東西に貫流する。この河川は、菊池郡菊陽町原水から熊本市鶴羽田に至り、坪井川に注ぐ。原水より上流は上井手と呼称される灌漑用水路で、菊池郡大津町の瀬田上井堰により白川の水を導き段丘面の水田を潤している。この上井手は、元和4年肥後藩主加藤忠広により開削が始められ、寛永14年細川忠利の時代に竣工したと伝えられる。熊本城下から菊池に至る菊池往還と同河川が交差する地点に堀川眼鏡橋が架設されている。

堀川眼鏡橋が所在する須屋は、慶長9（1604）年の検地帳では名請人21人、屋敷持18戸、田12町3反9畝、畠・屋敷41町6反4畝余、分米386石2斗余とされ、同13（1608）年では、戸数20戸、家数51軒、人口46人と記録されている。寛永10（1633）年の人畜改帳によると上生組に属し、その後竹迫手永に属した。

当地には、熊本城下から菊池市隈府を結ぶ菊池往還が走る。この往還は、熊本城下から立田口（東坪井）を出て熊本市薬園町で大津街道と分岐し、三軒町通りから西合志町須屋、黒石、御代志、泗水町高江を経て菊池市隈府に至る。「肥後国誌」によると、府新一町目札ノ辻（熊本市新町1丁目）から隈府町御高札場（菊池市隈府）まで6里と記され、日田往還の一部である。

また、この往還は須屋において熊本と鹿本郡鹿北町椎持を結ぶ椎持往還と分岐する。

遺跡の概要

i 調査の方法と経過

堀川眼鏡橋は、県道熊本菊鹿線の近世初期に開削された堀川に架かり河床との比高差が約10mである。

同橋は、上部にアスファルト舗装が施され現在も使用されている。当該事業は、小規模河川改良事業に伴い解体し架け替えられる同橋の記録保存を目的とする。また、解体にあたっては、交通止めの措置がなされ、調査終了後に工事が行われる。そのため、調査は安全面に十分な注意を払いながら迅速に処理することが望まれる。そこで、まず上部のアスファルト舗装を除去し、石橋を検出した後調査を開始した。

実測作業を正確且つ安全に実施するため、(株)パスコ熊本営業所に委託し写真測量を行った。

撮影条件、撮影方法、現況図作成等に必要な工程及び使用機材の計画等については、綿密な打ち合わせを行うこととし、撮影及び写真処理、図化にあたっては以下の点に留意することとした。

撮影縮尺は、1/100～1/150を標準とし、撮影はクレーン及び撮影アームを使用して目的にあった撮影方法を選択する。その際、調査範囲の形状、対空標識等の配置を考慮し、実体空白部を生じないように留意する。撮影には、ハッセルブラッドMKWE（F=40mm：フィルム6cm×6cm）又は、これと同等以上の性能を有するカメラを使用する。同一コースの隣接写真間の重複度は、60%を標準とし、隣接コースとの相互間は30%を標準とした。写真処理にあたっては、写真画像の損傷、汚損、歪曲等が生じないように細心の留意を図ることとした。このようにして撮影し、写真処理されたデータを基に1/20の縮尺で図化を行った。

ii 遺跡の概要

堀川眼鏡橋は、全体として緩やかなアーチを描き、基礎と輪石局部への荷重負担が大きいいため、建設にあたっては石材の選択や安全の確保等十分な配慮が必要であったと考えられる。

同橋は、構造上から架橋以後2度にわたる改修が実施されていることが、Fig. 2、3、4～7、9～11により確認される。1度目は、上流側への拡幅であり、次が近年の橋面へのアスファルト舗装である。

1度目の改修については、橋梁裏面において上流側と下流側において用いられている石材の加工に差異が認められ、左右両岸の基盤においても確認できる。このことは、江戸時代末期に架橋され、明治時代に拡幅されたとの伝承と一致する。上流側の輪石側面に凸面状の加工が認められ、橋梁裏面側にも同様の加工が上流側のみに一定幅をもって確認される。このような加工は、橋梁側面のデザインの配慮としてだけでなく、裏面側にも認められることから構造上強度を保つための対応としての意味も含まれるものと考えられる。

橋梁本体と拡幅した部分とに上部からの力を均等に伝え、橋梁の強度を保ち両者の分離を防ぐため、輪石の頂部付近3ヶ所で継ぎ石を組み込み、バランスのとれた荷重負担を図る工夫がなされている。

また、明治時代に拡幅した部分では、橋梁の脚部を広げ頂部でややもたれかかる形態により、橋梁自体の強度を保つ工夫がなされている。

壁石の積み方に関しては、上流側と比較して下流側は整然としており、建設に対する意気込みと共に芸術性の高さも看取される。

左右両岸の基礎部分においては、下流側に孔を穿った石が均等に配置されている。このことは、江戸時代末期の建設当時のものと考えられ、輪石の将来的なずれを防ぎ橋梁の強度を維持する目的で施された工夫であろう。

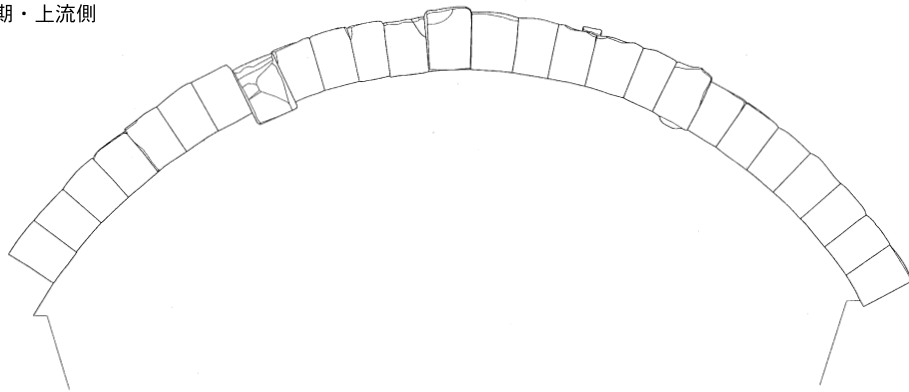
まとめ

平成9年度、堀川（促進）都市小規模河川改良事業に伴い解体されることとなった堀川眼鏡橋について測量等の記録保存を行った。同橋は、江戸時代末期に菊池往還に架けられた石橋である。具体的な架橋年代や石工の氏名等については、記録がなく不明である。

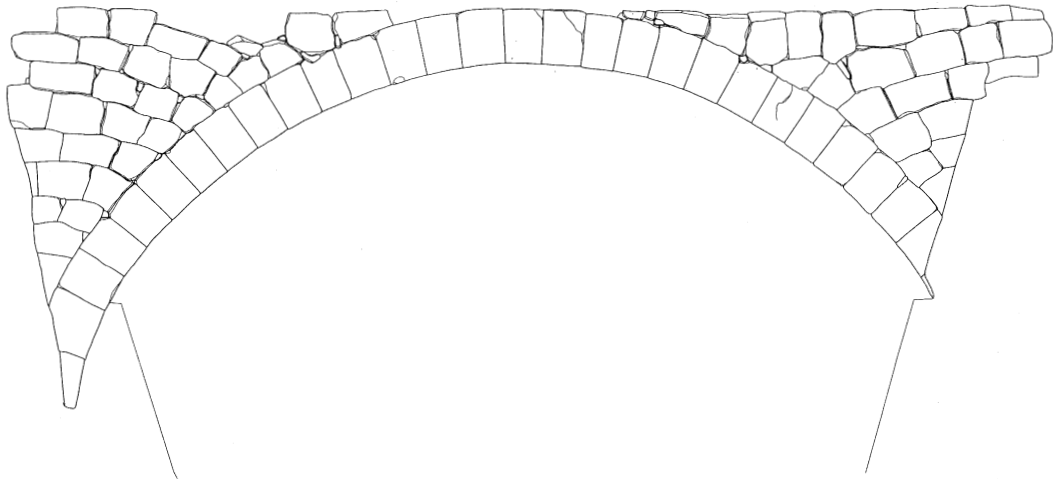
しかし、架橋後拡幅工事がなされたとの伝承があり、橋梁自体の構造上からも確認された。

また、架橋及び改修にあたって橋梁の強度を保つ様々な技術的工夫がなされていることが明らかとなった。これらのことは、菊池往還という道路の重要性を示すものとして理解されよう。

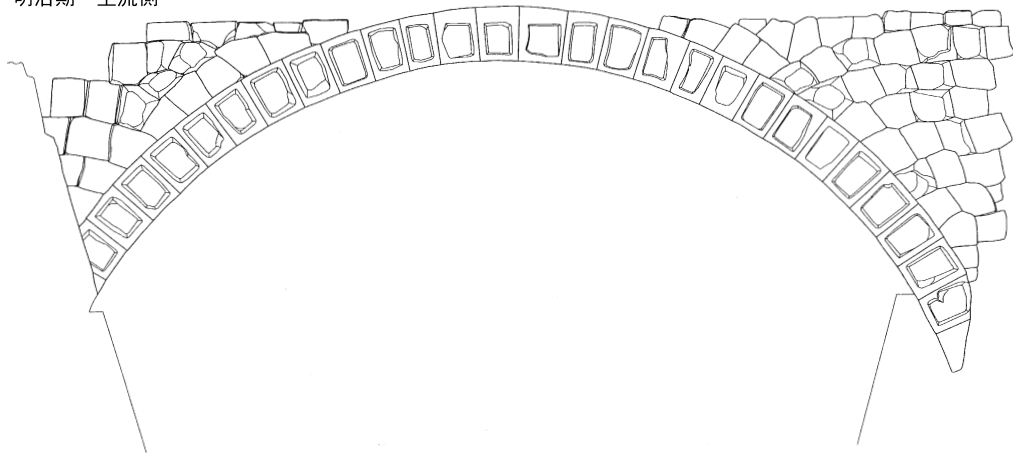
江戸期・上流側



江戸期・下流側



明治期・上流側



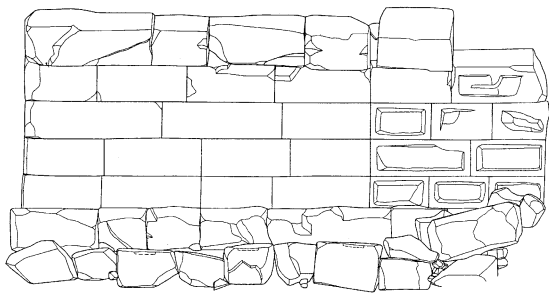
0 1 2m

第1図 立面図

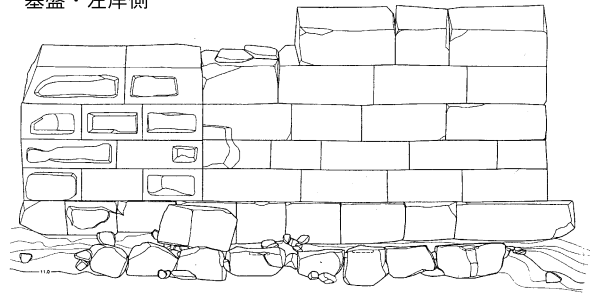
江戸期・下流側
左岸裏込め



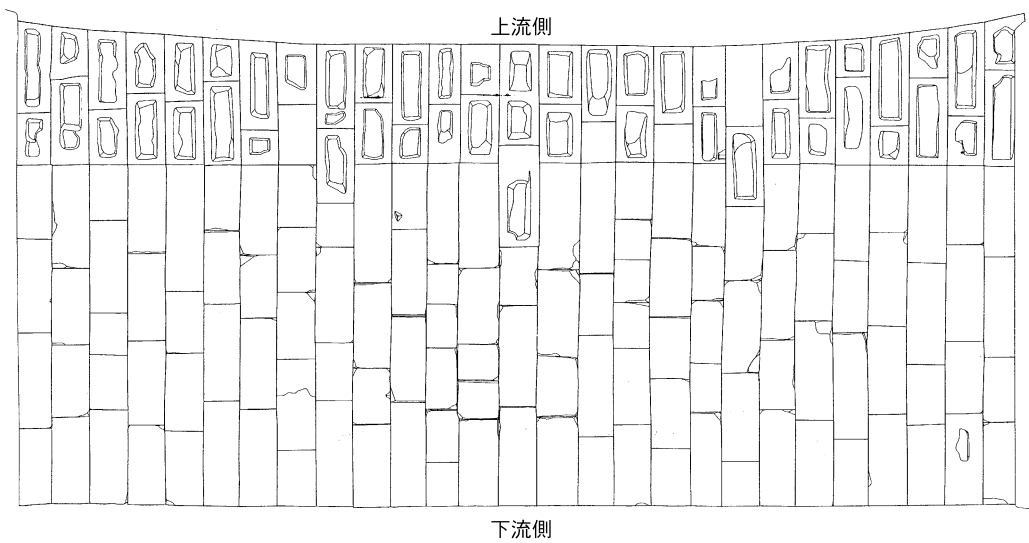
基盤・右岸側



基盤・左岸側

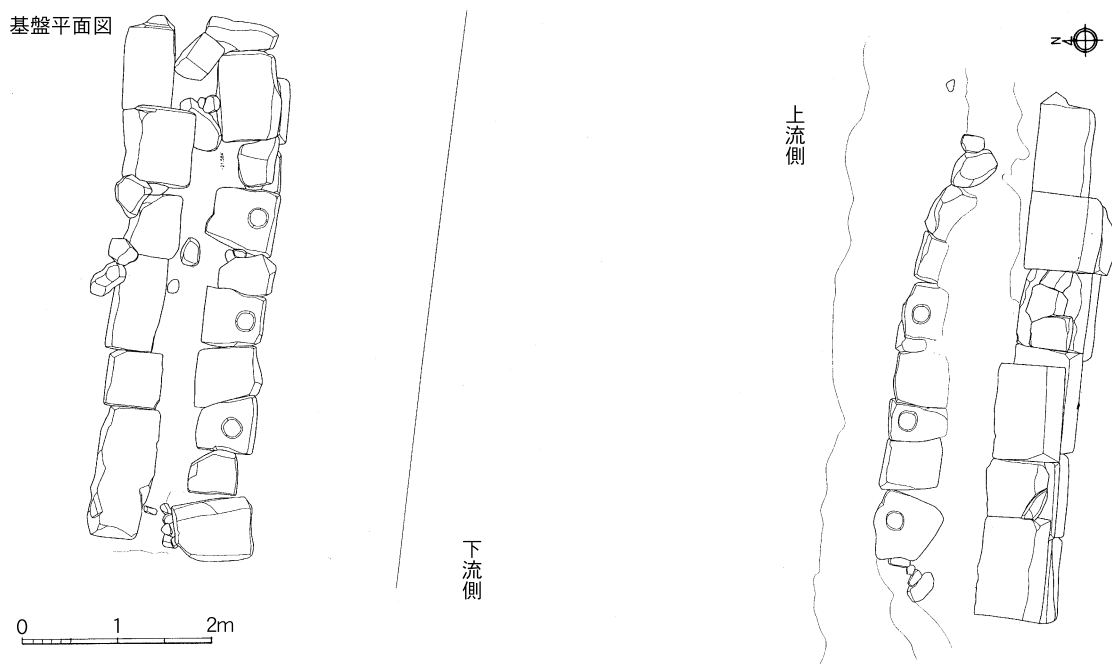
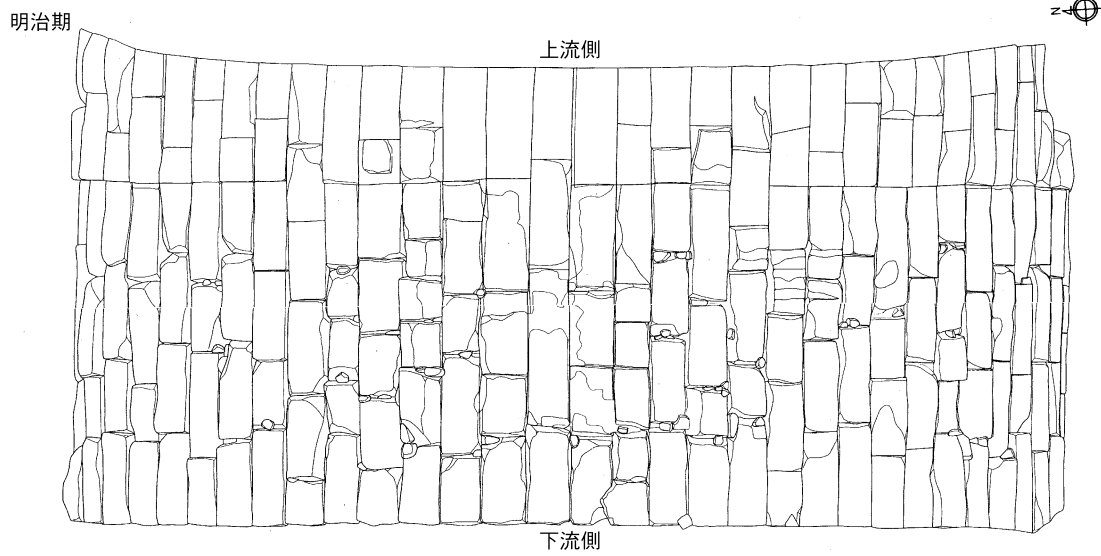
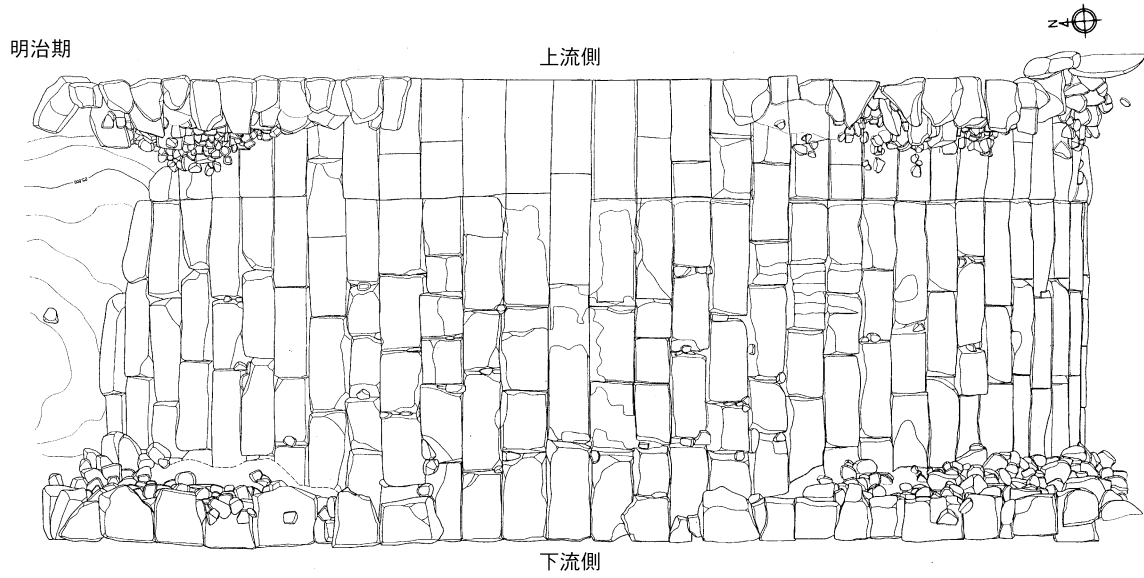


橋梁裏面

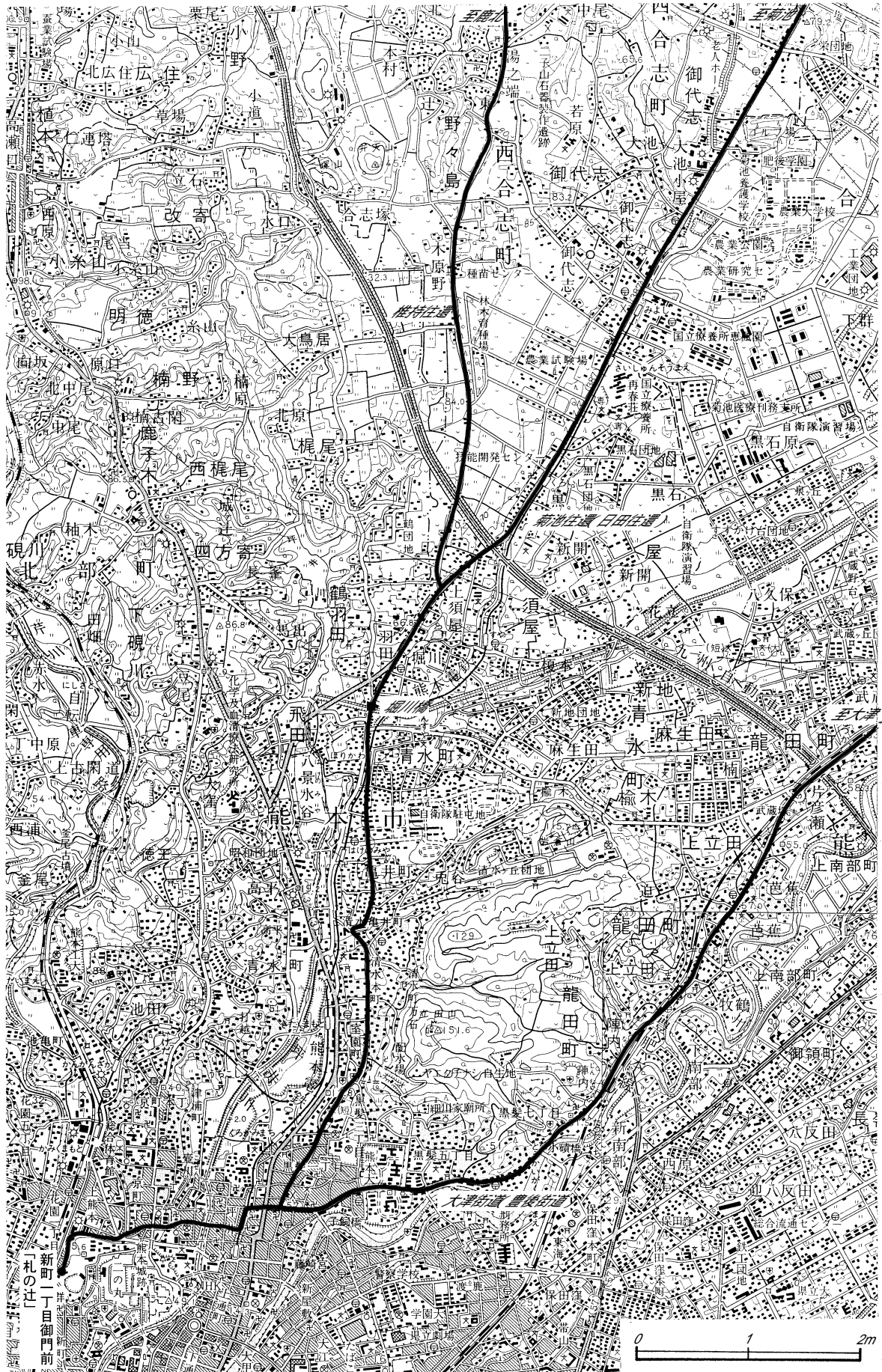


0 1 2m

第2図 立面図・展開図



第3図 平面図



第 4 図 堀川橋周辺主要街道

写 真 図 版

江戸期（上流側）・側面



江戸期（下流側）・側面



明治期（上流側）・側面



江戸期（下流側）・左岸裏込め



基盤・右岸側



基盤・左岸側



橋梁裏面

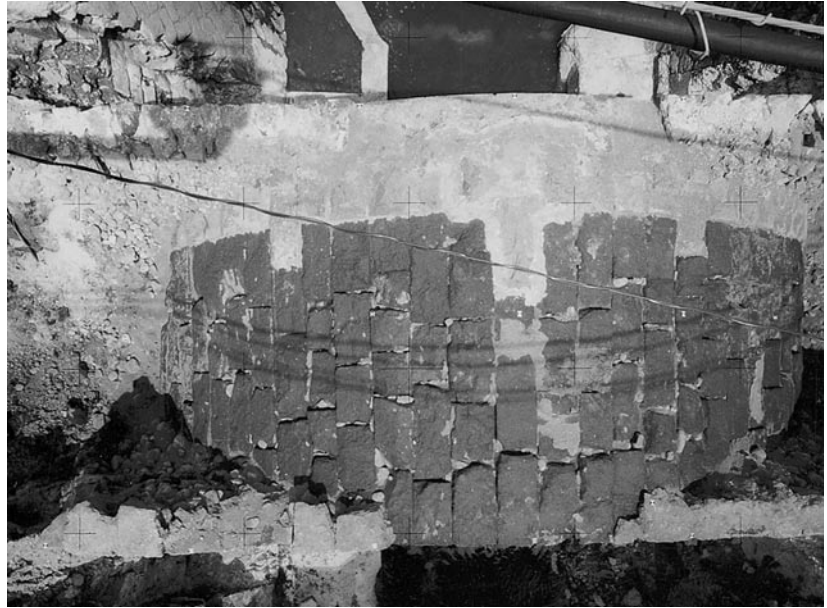
上流側

下流側



橋梁附目敢

上流側



下流側

上流側



下流側

基盤平面



上流側



下流側

あ と が き

平成 8、9 年度発掘調査を実施しました「竹迫宇土遺跡」の調査報告書をようやく発行することができました。

この 1 冊の報告書が完成するまでには、多くの方々の御協力と御努力がありました。そこで、その方々の御芳名を記して感謝の意を表します。

【発掘作業】

小田 堅、鹿帰瀬勇、木永昭臣、後藤タケ、園田繁信、鍋島洋子、野田 隆、
橋住安広、橋爪道雄、古荘 泰、野口秋美、渡辺英雄、材津幾代、荅ヨシメ、
福山須美子、本田睦男、本田チズ子、岩下武子、坂本 司、青木立子、麻生昭子、
梅原美奈子、楢永伸子、佐藤良子、下塩久美子、関原真弓、高宮淳子、塚本万里子、
村上照美、山口奈緒美、山口弓子、江崎栄子、江崎和義（順不同）

【整理作業】

江島園子、荒牧陽子、益田久子、山内洋子、河崎節子、山元友子、山切律子、
早野弘子、橋本由美子（順不同）

熊本県文化財調査報告 第192集

竹 迫 宇 土 遺 跡

平成12年12月28日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862-8609 熊本市水前寺 6 丁目18番 1 号

印刷 (株)秀 巧 社
〒861-2234 熊本県上益城郡益城町古閑106

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第192集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：竹迫宇土遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>